

## ヨハネ傳福音書

## 第一章

一 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。二 この言は太初に神とともに在り、三 萬の物  
これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。四 之に生命あり、この  
生命は人の光なりき。五 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。六 神より遣されたる人いでたり、その  
名をヨハネといふ。七 この人は證のために來れり、光に就きて證をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん爲な  
り。八 彼は光にあらず、光に就きて證せん爲に來れるなり。  
九 もろもろの人をてらす眞の光ありて、世にきたれり。一〇 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は  
彼を知らざりき。二 かれは己の國にきたりしに、己の民は之を受けざりき。三 されど之を受けし者、即ちその名  
を信ぜし者には、神の子となる權をあたへ給へり。四 斯る人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によら  
ず、ただ神によりて生れしなり。五 言は肉體となりて我らの中に宿りたまへり、我らその榮光を見たり、實に父  
の獨子の榮光にして恩恵と眞理とにて満てり。六 ヨハネ彼につきて證をなし、呼はりて言ふ『わが後にきたる者  
は我に勝れり、我より前にありし故なり』と、我が會ていへるは此の人なり。七 我らは皆その充ち満ちたる中よ

イ創一・一(西一・二七) 木約一・一〇 哥前八 一二・四六 四 加三・二六 夕(約一・一五二) 加三 ツ(羅一・三 加四・四 一一、一七・二二、 井太三・二一 約一・  
約一・二一) 六 西一・一六 來 三(約三・一九) ヲ約一・二〇 二六(二・七、八 提前三 二四 彼後一・一七 二七・三〇  
口約一・二四 默一九 一・二二 リ太三・一 ワ約一・二八 一・一八 彼前二・二 約一・二一、二二、四 二一、六・一七 羅五・ ノ約一・三〇  
ハ約一・二二(約一七 一・二五、二一(約一 二、三・二六、五 三 約一・七を見よ 約 三 約一・二九、 二二 約一・二九、 一・二九、二・九  
五) 一・二五、一四・六) 三・三三 三・二八 約一・三三 三・九 二(約一・二九) 二(約一・二九) 六、一八・三七 一・二九、二・九  
ニ(約一・二六) ト約八・一二、九五、ル(約一・一二徒一九 二三 五・一三 ソ約一・一 ナ路九・三二 約二・ウ約一・七

ク約七・二九  
 ヤ約一・二四を見よ  
 マ約一・二四を見よ  
 ケ出三三・二〇 約六  
 ・四六 西一・一五  
 提前六・一六 約登  
 四・一二  
 フ(啓一六・二二) 約  
 一三・二三  
 コ約三・一六、一八 約  
 四・九  
 エ(約三・一一)  
 テ約二・一八、二〇、  
 五・一〇、一五、一  
 三・三三等  
 六・一八、六・四一、ア(太一五二)  
 五二・七、一一、サ約一・七  
 一三・一五、三五、  
 八・二二、四八、五  
 二・五七、九・一八、  
 二二・一〇・二四、  
 三・三三等  
 ヌ(太二・二四、一  
 六・一四)  
 メ申一八・二五、一八  
 エ約一・二五を見よ  
 約一・二五(太二  
 ・二二)  
 二可一・七 路三・一六  
 (太三・一一)  
 路四・三 太三・三  
 可一・三 路三・四  
 路三・二六、一〇  
 路三・二六 徒一・五  
 ス約登三・五(太一・  
 二二)  
 約五三・七 約一・三  
 六 徒八・三二(彼  
 前一・一九 默五・  
 六・八、一二、一三、  
 六・一等)  
 口約一・一五を見よ  
 ハ約一・一五  
 二約一・七

七 受けて、恩恵に恩恵を加へらる。一七 律法はモーセによりて與へられ、恩恵と眞理とはイエス・キリストにより  
 八 て來れるなり。一八 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます獨子の神のみ之を顯し給へり。  
 一九 さてユダヤ人、エルサレムより祭司とレビ人とをヨハネの許に遣して『なんぢは誰なるか』と問はせし  
 二〇 時、ヨハネの證は斯のごとし。二〇 乃ち言ひあらはして諱まず『我はキリストにあらず』と言ひあらはせり。二一 ま  
 二一 た問ふ『さらば何、エリヤなるか』答ふ『然らず』問ふ『かの預言者なるか』答ふ『いな』二二 ここに彼ら言ふ『な  
 二三 んぢは誰なるか、我らを遣しし人々に答へ得るやうに爲よ、なんぢ己につきて何と言ふか』二三 答へて言ふ『我は  
 二四 預言者イザヤの云へるが如く「主の道を直くせよと、荒野に呼はる者の聲」なり』二四 かの遣されたる者は、パリ  
 二五 サイ人なりき。二五 また問ひて言ふ『なんぢ若しキリストに非ず、またエリヤにも、かの預言者にも非ずば、何故  
 二六 パプテスマを施すか』二六 ヨハネ答へて言ふ『我は水にてパプテスマを施す。なんぢらの中に汝らの知らぬもの  
 二七 一人たてり。二七 即ち我が後にきたる者なり、我はその鞋の紐を解くにも足らず』二八 これらの事は、ヨハネのパプ  
 二八 テスマを施しむたりしヨルダンの向なるベタニヤにてありしなり。  
 二九 明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給ふを見ていふ『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊。三〇 われ  
 三〇 曾て「わが後に來る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり」と云ひしは、此の人なり。三一 我もと彼を  
 三二 知らざりき。然れど彼のイスラエルに顯れんために、我きたりて水にてパプテスマを施すなり』三一 ヨハネまた證



井約一・三八  
 ノ約一・三四  
 才太二七・四二 可一  
 五・三二 約一二・  
 一三(太二・二)  
 ク約三・三を見よ  
 ヤ結一・一 太三・一六  
 路三・二一 徒七・五  
 六、一〇・一一 默  
 一九・一一  
 太八・二〇を見よ  
 ケ創二八・一二  
 フ約一・二九、三五、  
 四三  
 三三、六・八、一二、  
 一六、二二、二四  
 (約六・六〇一六六、  
 七・三、八・三一)  
 ア約一九・二六  
 サ太八・二九を見よ  
 キ(約七・六八、三〇、  
 八・二〇)  
 ユ(可七・三、四 約三  
 ・二五)  
 ヌ約四・四六  
 太二四・四九 路一  
 二・四五 徒二・一  
 三、一五 哥前一一  
 二一 第五・一八  
 撒前五・七 默一七  
 二、六  
 シ約二・二三、三・二、  
 四・五四、六・二、  
 一四、二六、三〇、  
 七・三一、九・一六、  
 一〇・四一、一一・  
 四七、一二・二八、  
 三七、二〇・三〇  
 三、二  
 五約一・四三  
 ヒ約一・一四を見よ  
 モ約二・一  
 セ約二・二を見よ  
 ス太四・二三を見よ

四九 イエス答へて言ひたまふ『ピリポの汝を呼ぶまへに我なんぢが無花果の樹の下に居るを見たり』  
 五〇 ふ『ラビ、なんぢは神の子なり、汝はイスラエルの王なり』  
 五一 にをるを見たりと言ひしに因りて信ずるか、汝これよりも更に大なる事を見ん』  
 五二 汝らに告ぐ、天ひらけて人の子のうへに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし』

## 第二章

一 三日めにガリラヤのカナに婚禮ありて、イエスの母そこに居り、ニイエスも弟子たちと共に婚禮  
 二 に招かれ給ふ。三 葡萄酒つきたれば、母、イエスに言ふ『かれらに葡萄酒なし』  
 三 四 イエス言ひ給ふ『をんなよ、我と汝となにの關係あらんや、我が時は未だ來らず』  
 四 五 母、僕どもに『何にても其の命する如くせよ』  
 五 六 彼處にユダヤ人の潔の例にしたがひて四五斗入りの石甕六個ならべあり。  
 六 七 イエス僕に『水を甕に滿せ』  
 七 八 といひ給へば、口まで滿す。ハまた言ひ給ふ『いま汲み取りて饗宴長に持ちゆけ』  
 八 九 乃ち持ちゆけり。九 饗宴長、葡萄酒になりたる水を嘗めて、その何處より來りしかを知らざれば、  
 九 一〇 水を汲みし僕どもは知れり。新郎を呼びて言ふ、『おほよそ人は先よき葡萄酒を出し、  
 一〇 一 酔のまはる頃ほひ劣れるものを出すに、汝はよき葡萄酒を今まで留め置きたり』  
 一 二 イエス此の第一の徴をガリラヤのカナにて行ひ、その榮光を顯し給ひたれば、弟子  
 二 三 たち彼を信じたり。

三 三 この後イエス及びその母・兄弟・弟子たちカペナウムに下りて、そこに數日留りたり。

二三 斯てユダヤ人の過越の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給ふ。二四 宮の内に牛・羊・鴿を賣るもの、兩替する者の坐するを見て、二五 繩を鞭につくり、羊をも牛をもみな宮より逐ひ出し、兩替する者の金を散し、その臺を倒し、二六 鴿をうる者に言ひ給ふ『これらの物を此處より取り去れ、わが父の家を商賣の家とすな』二七 弟子たち『なんぢの家をおもふ熱心われを食はん』と録されたるを憶ひ出せり。二八 ここにユダヤ人こたへてイエスに言ふ『なんぢ此等の事をなすからには、我らに何の徴を示すか』二九 答へて言ひ給ふ『なんぢら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起さん』三〇 ユダヤ人いふ『この宮を建つるには四十六年を経たり、なんぢは三日のうち之を起すか』三一 これはイエス己が體の宮をさして言ひ給へるなり。三二 然れば死人の中より甦へり給ひしうち、弟子たち斯く言ひ給ひしことを憶ひ出して聖書とイエスの言ひ給ひし言とを信じたり。三三 過越のまつりの間、イエス、エルサレムに在すほどに、多くの人々その爲し給へる徴を見て御名を信じたり。三四 然れどイエス己を彼らに任せ給はざりき。それは凡ての人を知り、三五 また人の衷にある事を知りたまへば、人に就きて證する者を要せざる故なり。

### 第三章

一 爰にパリサイ人にて名をニコデモといふ人あり、ユダヤ人の宰なり。二 夜イエスの許に來りて言ふ『ラビ、我らは汝の神より來る師なるを知る。神もし偕に在さずば、汝が行ふこれらの徴は誰もなし能はぬなり』三 イエス答へて言ひ給ふ『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生れずば、神の國を見ること

イ約六・四、一一・五 三・一四 八、一五・二九(徒カ詩二六・一〇 路一(約一・四二、四七 徒一〇・三八(約九 三二、四七、五三、 五(約五・一) 二太二・一二を見よ 六・一四 二四・二六、二七 約四八 三三、一〇・三八 八・三四、五一、五八 五・一七) 口申一六・二一六 路ホ路二・四九 又(爾五・一六) 二〇・九 徒一三・ 三九 一四・一〇、一一 徒 二四、一三、一六、 二・四一 約二・二三 へ詩六九・九 ル(哥前六・一九) 三三 路二三・一三を見よ 二〇・二二、三八、 八一四一一六太二二 ト約一・一九を見よ 二約二・二二を見よ 二約二・二二、一六、 二二、二三 可一一 二太二・三八を見よ 路二四・八 約一二 三九 路二二・一三を見よ 二約二・二二、一六、 二五、一七 路一 二太二・六、一、二七 二六(約二・一七、 一、六四、一三・一 約三・二六、 九・四五、四六(馬 四〇 可一四・五 一四・二六) 一六四、一三・一 約三・二六、 一八

ノ結三六・二五—二七 ヤ路二・四六 (路五・ 一七 徒五・三四) ア約八・二八、一二・ ユ路八・三二 約壹四 シ約三・三四、五・三 二五、二〇・二二  
 (弗五・二六 多三、 マ約七・二六、一七、 コ太八・二〇を見よ) 三約八・三二 約壹四 六・三八、六・二九、 二約八・二五、一六、 九・一八、二・四〇  
 五・六) オ約一・二三 哥前一 八・二六、二八、一 エ微三〇・四(申三〇 二・二二 徒二・三四 五・二二—一三 約壹 二・二六、二・四〇 九・一八、二・四〇 二・二六、二・四〇 二・二六、二・四〇  
 五・五〇 ク(詩一三五・七傳一 二・四九、一四・二 二・二二 徒二・三四 五・二二—一三 約壹 二・二六、二・四〇 九・一八、二・四〇 二・二六、二・四〇 二・二六、二・四〇  
 一・五 結三七・九) ケ約三・三二 九) 八 約壹四・九五 ム約三・三六、六・四 一七・三八、一八一 (二・四) 約壹一・六

能はず』四ニコデモ言ふ「人はや老いぬれば、争で生るる事を得んや、再び母の胎に入りて生るる事を得んや」イエス答へ給ふ「まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊によりて生れずば、神の國に入るに能はず。六肉によりて生るる者は肉なり、霊によりて生るる者は霊なり。七なんぢら新に生るべしと我が汝に言ひしを怪しむな。八風は己が好むところに吹く、汝その聲を聞けども、何處より來り何處へ往くを知らず。すべて霊によりて生るる者も斯のごとし」九ニコデモ答へて言ふ「いかに斯る事どものあり得べき」一〇イエス答へて言ひ給ふ「なんぢはイスラエルの師にして猶かかる事どもを知らぬか。二誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを證す、然るに汝らその證を受けず。三われ地のことを言ふに汝ら信ぜずば、天のことを言はんには争で信ぜんや。四天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。五モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。六すべて信する者の彼によりて永遠の生命を得ん爲なり」七それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。八神その子を世に遣したまへるは、世を審かん爲にあらず、彼によりて世の救はれん爲なり。九彼を信する者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の獨子の名を信ぜざりしが故なり。一〇その審判は是なり。光、世にきたりしに、人その行爲の惡しきによりて、光よりも暗黒を愛したり。一一すべて惡を行ふ者は光をにくみて光に來らず、その行爲の責められざらん爲なり。一二眞をおこなふ者は光にきたる、その行爲の神によりて行ひた

ることの顯れん爲なり。

三 この後イエス、弟子たちとユダヤの地にゆき、其處にともに留りてバプテスマを施し給ふ。三ヨハネもサ  
リムに近きアイノンにてバプテスマを施しむたり、其處に水おほくある故なり。人々つどひ來りてバプテスマを  
受く。二四ヨハネは未だ獄に入れられざりしなり。二五爰にヨハネの弟子たちと一人のユダヤ人との間に、潔につき  
て論起りたれば、二六彼らヨハネの許に來りて言ふ「ラビ、視よ、汝とともにヨルダンの彼方にありし者、なんぢ  
が證せし者、バプテスマを施し、人みなその許に往くなり」二七ヨハネ答へて言ふ「人は天より與へられずば、何  
をも受くること能はず。二八我はキリストにあらず」唯「その前に遣されたる者なり」と我が言ひしことに就きて  
證する者は、汝らなり。二九新婦をもつ者は新郎なり、新郎の友は、立ちて新郎の聲をきくとき、大に喜ぶ、この  
我が歡喜いま満ちたり。三〇彼は必ず盛になり、我は衰ふべし」

三一 上より來るものは凡ての物の上にある、地より出づるものは地の者にして、その語ることも地の事なり。  
天より來るものは凡ての物の上にある。三二彼その見しところ、聞きしところを證したまふに、誰もその證を受け  
ず。三三その證を受くる者は、印して神を眞なりとす。三四神の遣し給ひし者は神の言をかたる、神、御靈を賜ひて  
量りなければなり。三五父は御子を愛し、萬物をその手に委ね給へり。三六御子を信する者は永遠の生命をもち、  
御子に従はぬ者は生命を見ず、反つて神の怒その上に止るなり。

## 第四章

一主、おのれの弟子を造り、之にバプテスマを施すこと、ヨハネよりも多しとパリサイ人に聞え

イ約二・二を見よ 約三・二 四 二・二約一・四ヨ約三・一 提後二・一九 黙七 一〇・三八  
口約四・二二 へ約一・二八を見よ 又約一・二〇、二三 約二・二 二・二約一・四ヨ約三・一 提後二・一九 黙七 一〇・三八  
ハ太四・一二を見よ ト約一・七を見よ ル(太九・一五) 約三・二三を見よ 一、 哥前九・二 二・二約一・四ヨ約三・一 提後二・一九 黙七 一〇・三八  
二約二・六を見よ チ約四・二 二約一・五、二一、二六 約八・二三 二・二約一・四ヨ約三・一 提後二・一九 黙七 一〇・三八  
ホ太二三・七を見よ リ哥前四・七(來五・ 二四、一七、一三 カ(約四四五) 一三、四・三〇 二・二約一・四ヨ約三・一 提後二・一九 黙七 一〇・三八  
ウ約三・二三、二六 (哥前一・七)

井約三・二二、二六  
ノ約二・二を見よ  
オ約三・二二  
ク約二・一一、一二  
ヤ（路九・五二）

マ創三三・一九、四八  
・二二 雷二四・三二  
約四・一二  
ケ(太四・二、八・二  
四、二一・一八 約

一九・二八)  
約二・二を見よ  
約四・五、三〇、三九  
太一〇・五を見よ  
路九・五三 (喇四・

三一六、一一二四  
約八、四八  
羅六、二三  
耶二、二三、一七  
一三、約七、三七  
三八、默二、六

二三・一七、割二六  
 一九、賽五五・一  
 結四七・一一九、亞  
 一四・八、  
 約四・五、六  
 (約八・五三)

察四九・一〇 約六  
 ・三五・五一・五八  
 七・三七・三八 默  
 七・一六  
 太二五・四六を見よ  
 (約六・三四)

約一六・八  
太二三・一一を見よ  
創一二・六、七、三三  
一八、二〇 申二七  
一二（約四・一二）  
申一二・二九 書八

三三 七九・七  
申二二・五、一六・  
二、二六・二 王上  
八・二九 伐下七・一  
二 詩七八・六八  
(路九・五三)

三二 たるを知り給ひし時、二(その實イエス自らバプテスマを施ししにあらず、その弟子たちなり) 三 ユダヤを去りて  
五四 復ガリラヤに往き給ふ。四 サマリヤを経ざるを得ず。五 サマリヤのスカルといふ町にいたり給へるが、この町は  
六 ヤコブその子ヨセフに與へし土地に近くして、六 此處にヤコブの泉あり。イエス旅路に疲れて泉の傍らに坐し  
七 給ふ、時は第六時頃なりき。七 サマリヤの或女、水を汲まんとて來りたれば、イエス之に『われに飲ませよ』と  
九八 言ひたまふ。八 弟子たちは食物を買はんとて町にゆきしなり。九 サマリヤの女いふ『なんぢはユダヤ人なるに、  
一〇 如何なればサマリヤの女なる我に、飲むことを求むるか』これはユダヤ人とサマリヤ人とは交りせぬ故なり。一〇  
一 一 イエス答へて言ひ給ふ『なんぢ若し神の賜物を知り、また「我に飲ませよ」といふ者の誰なるを知りたらんには、  
二 之に求めしならん、然らば汝に活ける水を與へしものを』二 女いふ『主よ、なんぢは汲む物を持たず、井は深し、  
三 其の活ける水は何處より得しぞ。三 汝はこの井を我らに與へし我らの父ヤコブよりも大なるか、彼も、その子ら  
四 三 も、その家畜も、これより飲みたり』三 イエス答へて言ひ給ふ『すべて此の水をのむ者は、また渴かん。四 然れ  
五 二 ど我があたふる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが與ふる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧き  
六 一五 いづべし』一五 女いふ『主よ、わが渴くことなく、又ここに汲みに來ぬために、その水を我にあたへよ』一六 イエス  
七 一七 言ひ給ふ『ゆきて夫をここに呼びきたれ』一七 女こたへて言ふ『われに夫なし』イエス言ひ給ふ『夫なしといふは  
八 一九八 宜なり。一八 夫は五人までありしが、今ある者は、なんぢの夫にあらず。無しと云へるは眞なり』一九 女いふ『主よ、  
二〇 我なんぢを預言者とみとむ。二〇 我らの先祖たちは此の山にて拜したるに、汝らは拜すべき處をエルサレムなりと

二 言ふ』二イエス言ひ給ふ『をんなよ、我が言ふことを信ぜよ、此の山にもエルサレムにもあらで、汝ら父を拜  
三 する時きたるなり。三汝らは知らぬ者を拜し、我らは知る者を拜す、救はユダヤ人より出づればなり。三三されど  
四 眞の禮拜者の、靈と眞とをもて父を拜する時きたらん、今すでに來れり。父は斯のごとく拜する者を求めたま  
五 ふ。二四神は靈なれば、拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり』二五女いふ『我はキリストと稱ふるメシヤの來る  
六 ことを知る、彼きたらば、諸般のことを我らに告げん』二六イエス言ひ給ふ『なんぢと語る我はそれなり』  
七 時に弟子たち歸りきたりて、女と語り給ふを怪しみたれど、何を求め給ふか、何故かれと語り給ふかと問  
八 ふもの誰もなし。二八爰に女その水瓶を遺しおき、町にゆきて人々にいふ、二九『來りて見よ、わが爲しし事をことごと  
九 とく我に告げし人を。この人、或はキリストならんか』三〇人々町を出でてイエスの許にゆく。三一この間に弟子たち  
二 ち請ひて言ふ『ラビ、食し給へ』三二イエス言ひたまふ『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』三三弟子たち互  
三 にいふ『たれか食する物を持ち來りしか』三四イエス言ひ給ふ『われを遺し給へる者の御意を行ひ、その御業をな  
四 し遂ぐるは、是わが食物なり。三五なんぢら收穫時の來るには、なほ四月ありと言はずや。我なんぢらに告ぐ、目  
五 をあげて畑を見よ、はや黄みて收穫時になれり。三六刈る者は、價を受けて永遠の生命の實を集む。播く者と刈る  
六 者とともに喜ばん爲なり。三七俚諺に彼は播き、此は刈るといへるは、斯において眞なり。三八我なんぢらを遣して  
七 勞せざりしものを刈らしむ。他の人々さきに勞し、汝らはその勞を收むるなり』

イ約二・四 四一徒一七・二三 二約五・二五、一六、 二申一八・一八(約四 四・二五) ナ約五・三六、一七、 井羅一・二三  
ロ番二・一馬一・一 二詩一四七・一九、二 三二(約四・二二) 二二九 二太二・二三 約七 四(一九・二八)三 ノ(太二三・三七)可四  
一 提前二・八 〇 賽二・三 羅三 五・二八、一六・二二 二約八・二四を見よ 二六・三二 〇 二太九・三七 路一〇 二約四・三八  
ハ約五・二八、一六、 二、二、九・四五 二約八・二六、二七 弗(約九・三五—三七) 二太二三・七を見よ 二二 二太九・三七 路一〇 二約四・三八  
二(約四・二三、五 二約四・二四(腓三、 二・二八、六・一八 二約二・二を見よ 二約二・二を見よ 二約二・二を見よ 二約二・二を見よ 二約二・二を見よ  
二五、一六・三三) 三) 二太一・一七を見よ 二約四・八 二約五・三〇、六・三 二約九・一七、一八 二約三・一八 米六、  
二(王下一七・二八一 ト約一・二四 二約一・四一 二約四・一七、一八(約 八、一四・三一 二約四・二四 二約三・一八 米六、

マ約四・五・八  
ケ約四・二九  
三提前四・一〇  
約登二・二、四・一  
テ約二・二三、四・二  
ユ大四・一三を見よ  
メ約四・三、五四  
ミ但四・二、三、六・二  
七太二四・二四  
可一三・二二 徒二  
二羅一五・一九  
二九、二二、四三、  
四・三〇、五・二二、  
六・八、七・三六、  
一四・三、一五・一  
二羅一五・一九  
哥後二・二二 撒  
後二・九 來二・四  
エ(徒二・一四、一  
六三四、一八・八)  
シ(可五・三五 路八・  
四九約二・二二、  
モ(約二・一一)  
セ約二・二一を見よ

三九 此の町の多くのサマリヤ人、女の「わが爲しし事をことごとく告げし」と證したる言によりてイエスを

信じたり。四〇 斯てサマリヤ人、御許にきたりて此の町に留らんことを請ひたれば、此處に二日とどまり給ふ。四一

御言によりて猶もおほくの人、信じたり。四二 かくて女に言ふ「今われらの信ずるは汝のかたる言によるにあらず、  
親しく聽きて、これは眞に世の救主なりと知りたる故なり」

四三 二日の後イエスここを去りてガリラヤに往き給ふ。四四 イエス自ら證して預言者は己が郷にて尊ばるる事  
なしと言ひ給へり。四五 斯てガリラヤに往き給へば、ガリラヤ人これを迎へたり。前に彼らも祭に上り、その祭の  
時にエルサレムにて行ひ給ひし事を見たる故なり。

四六 イエス復ガリラヤのカナに往き給ふ、ここは前に水を葡萄酒になし給ひし處なり。時に王の近臣あり、そ  
の子カペナウムにて病みゐたれば、四七 イエスのユダヤよりガリラヤに來り給へるを聞き、御許にゆきてカペナウ  
ムに下り、その子を醫し給はんことを請ふ、子は死ぬばかりなりしなり。四八 爰にイエス言ひ給ふ「なんぢら徴と  
不思議とを見ずば、信ぜじ」四九 近臣いふ「主よ、わが子の死なぬ間にくだり給へ」五〇 イエス言ひ給ふ「かへれ、  
汝の子は生くるなり」彼はイエスの言ひ給ひしことを信じて歸りしが、五一 下る途中、僕ども往き遇ひて、その子  
の生きたることを告ぐ。五二 その癒えはじめし時を問ひしに「昨日の第七時に熱去れり」といふ。五三 父その時の、  
イエスが「なんぢの子は生くるなり」と言ひ給ひし時と同じきを知り、而して己も家の者もみな信じたり。五四 是  
はイエス、ユダヤよりガリラヤに往きて爲し給へる第二の徴なり。



ソ約一四・一二 九徒一〇・四二、ウ約一二・四四(約三才約三・三を見よ) ケ約一・四を見よ(約エ約四・二二を見よ) サ約八・一六  
 ツ羅四・二七、八・一 一七・三一、二八、二〇・三一、ク路一五・二四を見よ 六・五七、テ但一二・二、徒二四、キ約四・三四、六・三、ミ約一・七を見よ  
 一 一(路一〇・二六約壹約壹五・一三) ヤ約四・二三を見よ フ約五・二二を見よ 二五(太二五・八、シ約五・三二、約壹五  
 二約一一・二五 二・二三) 井約三・一八 マ(約六・六〇、八・四、コ約一一・二四、哥前四六) ユ(約八・一四) ヌ約五・三七  
 ナ約五・二七、九・三 ム約三・三を見よ ノ約壹三・一四 一五・五二 ア約五・一九

が父といひて己を神と等しき者になし給ひし故なり。  
 一九 イエス答へて言ひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給ふことを見て行ふほかは自ら何事をも

爲し得ず、父のなし給ふことは子もまた同じく爲すなり。二〇 父は子を愛してその爲す所をことごとく子に示した

まふ。また更に大なる業を示し給はん、汝等をして怪しましめん爲なり。二一 父の死にし者を起して活し給ふこと

く、子もまた己が欲する者を活すなり。二二 父は誰をも審き給はず、審判をさへみな子に委ね給へり。二三 これ凡て

の人の父を敬ふごとくに子を敬はん爲なり。子を敬はぬ者は之を遣し給ひし父をも敬はぬなり。二四 誠にまことに

汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給ひし者を信する人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より

生命に移れるなり。二五 誠にまことに汝らに告ぐ、死にし人、神の子の聲をきく時きたらん、今すでに來れり、而

して聞く人は活くべし。二六 これ父みづから生命を有ち給ふごとく、子にも自ら生命を有つことを得させ、二七 また

人の子たるに因りて審判する權を與へ給ひしなり。二八 汝ら之を怪しむな、墓にある者みな神の子の聲をききて出

づる時きたらん。二九 善をなしし者は生命に甦へり、惡を行ひし者は審判に甦へるべし。

三〇 我みづから何事もなし能はず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し、それは我が意を求めずして、

我を遣し給ひし者の御意を求むるに因る。三一 我もし己につきて證せば、我が證は眞ならず。三二 我につきて證する

者は、他にあり、その我につきて證する證の眞なるを我は知る。三三 なんぢら前に人をヨハネに遣ししに、彼は眞

につきて證せり。三四 我は人よりの證を受くる事をせねど、唯なんぢらの救はれん爲に之を言ふ。三五 かれは燃えて

三六

輝く燈火なりしが、汝等その光にありて暫時よろこぶ事をせり。然れど我にはヨハネの證よりも大なる證あり。父の我にあたへて成し遂げしめ給ふわざ、即ち我がおこなふ業は、我につきて父の我を遣し給ひたるを證し、また我をおくり給ひし父も、我につきて證し給へり。汝らは未だその御聲を聞きし事なく、その御形を見し事なし。三六その御言は汝らの衷にとどまらず、その遣し給ひし者を信ぜぬに因りて知らるるなり。三九汝らは聖書に永遠の生命ありと思ひて之を查ぶ、されどこの聖書は我につきて證するものなり。四〇然るに汝ら生命を得んために我に來るを欲せず。四一我は人よりの譽をうる事をせず、ただ汝らの衷に神を愛する事なきを知る。四二我はわが父の名によりて來りしに、汝等われを受けず、もし他の人おのれの名によりて來らば之を受けん。四三互に譽をうけて唯一の神よりの譽を求めぬ汝らは、争で信ずることを得んや。四五われ父に汝らを訴へんとと思ふな、訴ふるもの一人あり、汝らが頼とするモーセなり。四六若しモーセを信ぜしならば、我を信ぜしならん、彼は我につきて録したればなり。四七されど彼の書を信ぜずば、争で我が言を信ぜんや』

**第六章**

一この後イエス、ガリラヤの海、即ちテベリヤの海の彼方にゆき給へば、二大なる群衆これに従ふ、これは病みたる者に行ひたまへる徴を見し故なり。三イエス、山に登りて、弟子たちと共にそこに座し給ふ。四時はユダヤ人の祭なる過越に近し。五イエス眼をあげて大なる群衆のきたるを見てピリポに言ひ給ふ『われら何處よりパンを買ひて、此の人々に食はすべきか』六かく言ひ給ふはピリポを試むるためにて、

イ(母後二一・一七彼後一・一九) 約二・二三  
ホ約三・一七を見よ 路二四・二五、二七  
ロ(可一・五) 徒一三・二七  
ハ約四・三四を見よ 又約八・五〇、五四  
ニ約一〇・二五、三八、ト約二二・一四 提前二・六(約五・四四、七・一八、カ羅二・二九、ヨ(約九・二八、羅二・二四(太二・四、一七二二九)ル(太二四・五)一七)  
タ路二四・二七を見よ ヲ太四・一八を見よ  
テ(路二六・二九、三一) 提後三・一五、二二  
ソ一・一三、太一四・ナ約二・二一を見よ  
三二・二二、可六・ラ約六・一五(太五・三二、四四、路九・一〇、一七、ム約二・二三を見よ  
ウ約一・四三を見よ  
フ約一・四三を見よ  
ノ(母後一三・五、二二)

オ可六・三七  
ク太一八・二八を見よ  
ヤ約二・二を見よ  
マ約一・四〇  
ケ王下四・四二  
フ約六・一一、二二、  
九一・三三  
ア詩一四五・一六  
サ約二・二を見よ  
エ(太一四・二二)  
キ太一四・二〇を見よ  
ユ約二・二一を見よ  
メ太一一・三三、二二、  
一一約一・二二  
ミ(約一八・三六、三  
七)  
シ一五・二一 太一四  
ヒ約六・三  
ニ三一・三三 可六  
四六・五二(太八  
二八)  
エ約六・三  
セ太一四・二六、二九  
可六・四八、四九  
(詩九五・五)  
ス太一四・二七を見よ  
イ約六・二  
ロ約六・一五一・一七  
ハ(約六・一)  
ニ路七・二三を見よ  
ホ約六・一一  
ヘ約六・一七、五九  
(太一四・三四 可六  
五三)

自ら爲さんとする事を知り給ふなり。セピリボ答へて言ふ「二百デナリのパンありとも、人々すこしづつ受くる

になほ足らじ」ハ弟子の一人にてシモン・ペテロの兄弟なるアンデレ言ふ「ここに一人の童子あり、大麥のパン

五つと小き肴二つとをもてり、然れど此の多くの人には何にか爲らん」イエス言ひたまふ「人々を坐せしめよ」

その處に多くの草ありて人々坐せしが、その數おほよそ五千なりき。二爰にイエス、パンを取りて謝し、坐し

たる人々に分ちあたへ、また肴をも然なして、その欲するほど與へ給ふ。三人々の飽きたるのち弟子たちに言ひ

たまふ「廢るもののなきやうに擘きたる餘をあつめよ」乃ち集めたるに、五つの大麥のパンの擘きたるを食ひ

しものの餘、十二の筐に満ちたり。人々その爲し給ひし徴を見ていふ「實にこれは世に来るべき預言者なり」

イエス彼らが來りて己をとらへ、王となさんとするを知り、復ひとりにて山に遁れたまふ。

夕になりて弟子たち海にくだり、船にのり海を渡りて、カペナウムに往かんとす。既に暗くなりたる

に、イエス未だ來りたまはず。大風ふきて海ややに荒出づ。かくて四五十丁こぎ出でしに、イエスの海の上

をあゆみ、船に近づき給ふを見て懼れたれば、イエス言ひたまふ「我なり、懼るな」乃ちイエスを船に歡び

迎へしに、船は直ちに往かんとする地に著けり。

明くる日、海のかなたに立てる群衆は、一艘のほか船なく、又イエスは弟子たちと共に乗りたまはず、

弟子等のみ出でゆきしを見たり。時にテベリヤより數艘の船、主の謝して人々にパンを食せ給ひし處の近くに

來る。ここに群衆はイエスも居給はず、弟子たちも居らぬを見てその船に乗り、イエスを尋ねてカペナウムに

往けり。二五 遂に海の彼方にてイエスに遇ひて言ふ『ラビ、何時ここに來り給ひしか』二六 イエス答へて言ひ給ふ  
『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らが我を尋ねるは、徴を見し故ならでパンを食ひて飽きたる故なり。二七 朽つる糧  
のためならで永遠の生命にまで至る糧のために働け。これは人の子の汝らに與へんと爲るものなり、父なる神は  
印して彼を證し給ひたるに因る』二八 ここに彼ら言ふ『われら神の業を行はんには何をなすべきか』二九 イエス答へ  
て言ひたまふ『神の業はその遣し給へる者を信する是なり』三〇 彼ら言ふ『さらば我らが見て汝を信ぜんために、  
何の徴をなすか、何を行ふか。三一 我らの先祖は荒野にてマナを食へり、録して「天よりパンを彼らに與へて食は  
しめたり」と云へるが如し』三二 イエス言ひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、モーセは天よりのパンを汝らに與へ  
しにあらず、然れど我が父は天よりの眞のパンを與へたまふ。三三 神のパンは天より降りて生命を世に與ふるもの  
なり』三四 彼等いふ『主よ、そのパンを常に與へよ』三五 イエス言ひ給ふ『われは生命のパンなり、我にきたる者は  
飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。三六 然れど汝らは我を見てなほ信ぜず、我さきに之を告げ  
たり。三七 父の我に賜ふものは皆われに來らん、我にきたる者は、我これを退けず。三八 夫わが天より降りしは我が  
意をなさん爲にあらず、我を遣し給ひし者の御意をなさん爲なり。三九 我を遣し給ひし者の御意は、すべて我に賜  
ひし者を、我その一つをも失はずして終の日に甦へらする是なり。四〇 わが父の御意は、すべて子を見て信する者  
の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦へらすべし』

イ太二三・七を見よ  
口約三・三を見よ  
ハ約六・二四  
ニ約六・二、一四、三〇  
ホ賽五五・二  
ヘ約三・一五、一六、  
四・一四、六・四〇、  
四七、五四、一〇・  
二八、一七、二三  
ト太八・二〇を見よ  
約六・五三、六一  
チ約三・三三を見よ  
リ太三・一七、一七・  
五 可一・一一、九  
路三・二二、  
九・三五 約一・三  
三・五・三七、八・  
一八 徒二・二二  
後一・一七  
又(撒前)一・三 雅二・  
二二 約三・二三  
ル約三・一七を見よ  
カ出二六・四、一五 尼  
九・二五 詩七八・  
二四、一〇五・四〇  
約六・二、一四、二  
六  
ワ出二六・二一 民一  
一・八 約六・四九、  
タ約六・五〇 (約六・  
四一)  
レ(約四・一五)  
ソ約六・四八、五一  
ツ約四・一四  
ネ約六・二六  
ナ約一七・二、二四  
ラ約三・一三を見よ  
ム太二六・三九を見よ  
ウ約六・二九  
井約四・三四、五・三  
〇  
ノ約一七・一二、一八  
・九  
オ約六・四〇、四四、  
五四(雅五・一五)  
ク約一二・四五 (約  
一四・一七、一九)  
ヤ約三・一六を見よ

マ約一・一九を見よ  
 ケ約六・五一、五八  
 (約六・三三)  
 フ路四・二二  
 コ(約七・二七、二八)  
 エ約六・三八、六二  
 テ耶三一・三 何二一

・四 約六・六五、  
 一二・三二  
 ア約六・三九  
 サ(徒七・四二)、一三・  
 四〇)  
 一・三四 耶三  
 一・三四 耶三・一五  
 シ約六・三五、五一

撒前四・九  
 工約六・三一、五八  
 ヒ職二・一七  
 モ約六・三三  
 セ約六・四一、五八  
 ス約六・三五、四八  
 イ約六・五三、五六  
 ロ(約一・二九、三・  
 一四、一五 來一〇・  
 一〇 約四・一〇)  
 ハ(約九・二六、一〇・  
 一九)  
 ニ約三・三を見よ  
 ホ太八・二〇を見よ  
 へ約六・三九を見よ

ト約一五・四、五 約登  
 二・二四、三・二四、  
 四・一五、一六  
 (約一七・二三)  
 チ(太一六・一六 約  
 五・二六)  
 リ約三・一七を見よ

ヌ約六・四一、五一  
 (約六・三三)  
 ル約六・三一、四九  
 ナ約六・四七を見よ

四二 爰にユダヤ人ら、イエスの『われは天より降りしパンなり』と言ひ給ひしにより、四三 咬きて言ふ『これは

ヨセフの子イエスならずや、我等はその父母を知る、何ぞ今『われは天より降りしパンなり』と言ふか』四三 イエス答へて

言ひ給ふ『なんぢら咬き合ふな、四四 我を遣しし父ひき給はずば、誰も我に來ること能はず、我これを終の日に甦

へらすべし。四五 預言者たちの書に『彼らみな神に教へられん』と録されたり。すべて父より聽きて學びし者は我

にきたる。四六 これは父を見し者ありとにあらず、ただ神よりの者のみ父を見たり。四七 誠に誠に、なんぢらに告

ぐ、信する者は永遠の生命をもつ。四八 我は生命のパンなり。四九 汝らの先祖は荒野にてマナを食ひしが死にたり。

五〇 天より降るパンは、食ふ者をして死ぬる事なからしむるなり。五一 我は天より降りし活けるパンなり、人このパ

ンを食はば永遠に活くべし。我が與ふるパンは我が肉なり、世の生命のために之を與へん』

五二 爰にユダヤ人、たがひに争ひて言ふ『この人はいかで己が肉を我らに與へて食はしむることを得ん』五三 イ

エス言ひ給ふ『まことに誠に、なんぢらに告ぐ、人の子の肉を食はず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。五四

わが肉をくらひ、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ、われ終の日にこれを甦へらすべし。五五 夫わが肉は眞の

食物、わが血は眞の飲物なり。五六 わが肉をくらひ、我が血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。五七 活ける

父の我をつかはし、我の父によりて活くるごとく、我をくらふ者も我によりて活くべし。五八 天より降りしパン

は、先祖たちが食ひてなほ死にし如きものにあらず、此のパンを食ふものは永遠に活きん』五九 此等のことはイエ

ス、カペナウムにて教しふるとき、會堂くわいたうにて言いひ給たまひしなり。

六〇弟子たちの中おほくの者これを聞きて言ふ『こは甚だしき言なるかな、誰か能く聴き得べき』六一イエス

弟子たちの之に就きてつひや 呟くを自ら知りて言ひ給ふ『このことは汝らを躓かするか。六三さらば人の子の原居りし處』

六六三  
に昇るを見れば如何。六三  
活すものは靈なり、  
肉は益する所なし、  
わが汝らに語りし言は、  
靈なり生命なり。六四  
され

ど汝<sup>なんぢ</sup>らの中に信<sup>しん</sup>ぜぬ者<sup>もの</sup>どもあり』イエス初<sup>はじめ</sup>より信<sup>しん</sup>ぜぬ者<sup>もの</sup>どもは誰<sup>たれ</sup>、おのれを賣<sup>う</sup>る者<sup>もの</sup>は誰<sup>たれ</sup>なるかを知<sup>し</sup>り給<sup>たま</sup>へるなり。

六五 益か斯くて言いひたまふ『この故ゆゑに我われさきに汝なんぢらに告つげて父ちちより賜たまはりたる者ものならずば我われに來きたるを得えずと言いひしなり』

六六  
六七

六六  
六七

スにおいて弟子等のうち多くの者、かへり去りて、復イエスと共に歩まざりき。六七 イエス十二弟子に言ひ

給ふ『なんぢらも去らんとするか』  
シモン・ペテロ答ふ『主よ、われら誰にゆかん、永遠の生命の言は汝

にあり。又われらは信じ、かつ知る、なんぢは神の聖者なり』イエス答へ給ふ『われ汝ら十二人を選びしに

セ一 あらずや、然るに汝らの中の一人は惡魔なり』（三）セ一 イスカリオテのシモンの子ユダを指して言ひ給へるなり、彼は

十二弟子の一人なれど、イエスを賣らんとする者なり。

## 第七章

一 この後のちイエス、ガリラヤのうちを巡めぐり給たまふ、ユダヤ人の殺ころさんとするに因よりてユダヤのうちを巡めぐることを欲ほつし給たまはぬなり。  
 ニ ユダヤ人の假かりいほ廬まつりの祭まつりちかづきたれば、  
 三 兄弟きやうだいたちイエスに言いふ「な

んぢの行ふ業を弟子たちにも見せんために、此處を去りてユダヤに往け。

四 誰にても自ら顯れんことを求めて隠

イ約六・二四を見よ  
(約三・一三)  
ワ約六・三七、四四  
レ(太一六・一六)  
・一六、一九  
井約六・六四を見よ  
ク利二三・三四

口太四・二三を見よ  
チ母後三・六  
力(太二三・一一)約三  
リ約六・六八  
又約六・六〇、六六  
ヨ約六・六〇、六四  
・二七  
・四九、五〇 徒五・  
二、二七、一七・  
(約一一・五四)  
才約五・二六、一八、  
ヤ太一二・四六を見よ  
(申一六・二六)

ホ太一・六を見よ  
ル大一〇・四を見よ  
タ太一〇・二  
約二・  
ツ約四・二六  
ム約一二・四、  
一三・  
七・一九  
（約八・  
約七・五、一〇  
ヘ約六・五三  
約六・七一  
二、六・七〇、七一、  
ネ可一・三四を見よ  
二、二六  
三七、四〇、  
一一・  
ト可一六・一九を見よ  
ヲ約二・二五を見よ  
二〇・二四  
ナ路六・一三 約一五  
ウ可一四・一〇  
五三）  
マ約二一・一を見よ  
ク可三・二一

フ(太二六・一八 約七・三を見よ) 三八、二〇・一九 二二 約七・四六 五〇、五四、一二・ 一二・一八 七・二三  
 (八、三〇) サ約一・一五六 (約一二・四二) 徒四・二三 徒三・三二 但一二 四三 太二一・一八 約八 二利一二・三  
 コ約一五・一八、一九 キ約七・四〇―四三 ミ太二六・五五を見よ 工約三・一一を見よ 一〇 約三・二二、セ約二・二九 四八、四九、五二、 木創一七・一〇―  
 エ約三・一九、二〇 ユ約七・四七 約七・二八 約一四・一〇(約三 八・四三、四四) ス約一・一七 一〇・二〇 四、二三―二七、  
 テ(約七・六) メ約九・二二、一九・シ(路二・四七、四・ 三四) モ(約五・四一 八・イ約七・一を見よ 可ハ約五・二一九、一六、 二一・四 徒七・八

五 に業をなす者なし。汝これらの事を爲すからには己を世にあらはせ』 五はその兄弟たちもイエスを信ぜぬ故な  
 七六 り。六 爰にイエス言ひ給ふ『わが時ははまだ到らず、汝らの時は常に備れり。七 世は汝らを憎むこと能はねど我  
 八 を憎む、我は世の所作の惡しきを證すればなり。八 なんぢら祭に上れ、わが時いまだ満たねば、我は今この祭に  
 九 のぼらず』九 かく言ひて尙ガリラヤに留り給ふ。  
 一〇 而して兄弟たちの、祭にのぼりたる後、あらはならで潜びやかに上り給ふ。二 祭にあたりユダヤ人等イエ  
 二三 スを尋ねて『かれは何處に居るか』と言ふ。三 また群衆のうちに騒く者おほくありて、或は『イエスは善き人  
 二四 なり』といひ、或は『いな群衆を惑はすなり』と言ふ。三 然れどユダヤ人を懼るるに因りて誰もイエスのことを  
 公然に言はず。  
 一四 祭も、はや半となりし頃イエス宮にのぼりて教へ給へば、一五 ユダヤ人あやしみて言ふ『この人は學びし事

一六 なきに、如何して書を知るか』一六 イエス答へて言ひ給ふ『わが教はわが教にあらず、我を遣し給ひし者の教なり。  
 一七 人もし御意を行はんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。一八 己より語るものは己の榮光  
 一九 をもとむ、己を遣しし者の榮光を求むる者は眞なり、その中に不義なし。一九 モーセは汝らに律法を與へしにあら  
 二〇 ずや、然れど汝等のうちに律法を守る者なし。汝ら何ゆゑ我を殺さんとするか』二〇 群衆こたふ『なんぢは惡鬼に憑  
 二一 かれたり、誰が汝を殺さんとするぞ』二一 イエス答へて言ひ給ふ『われ一つの業をなしたれば汝等みな怪しめり。  
 二二 モーセは汝らに割禮を命じたり(これはモーセより起りしとにあらず、先祖より起りしなり)この故に汝ら

安息日にも人に割禮を施す。三三 モーセの律法の廢らぬために安息日に人の割禮を受くる事あらば、何ぞ安息日に

人の全身を健かにせしとて我を怒るか。三四 外貌によりて審くな、正しき審判にて審け』

三五 爰にエルサレムの或る人々いふ『これは人々の殺さんとする者ならずや。三六 視よ、公然に語るに之に對し

て何をも言ふ者なし、司たちは此の人のキリストたるを眞に認めしならんか。三七 然れど我らは此の人の何處より

かを知る、キリストの來る時には、その何處よりかを知る者なし』三八 爰にイエス宮にて教へつつ呼はりて言ひ給

ふ『なんぢら我を知り、亦わが何處よりかを知る。されど我は己より來るにあらず、眞の者ありて我を遣し給へ

り。汝らは彼を知らず、三九 我は彼を知る。我は彼より出で、彼は我を遣し給ひしに因りてなり』四〇 爰に人々イエ

スを捕へんと謀りたれど、彼の時いまだ到らぬ故に手出する者なかりき。四一 斯て群衆のうち多くの人々イエスを

信じて『キリスト來るとも、此の人の行ひしより多く徴を行はんや』と言ふ。四二 イエスにつきて群衆のかく囁く

ことパリサイ人の耳に入りたれば、祭司長・パリサイ人ら彼を捕へんとて下役どもを遣ししに、四三 イエス言ひ給

ふ『我なほ暫く汝らと偕に居り、而してのち我を遣し給ひし者の御許に往く。四四 汝ら我を尋ねん、されど逢はざ

るべし、汝等わが居る處に往くこと能はず』四五 爰にユダヤ人ら互に言ふ『この人われらの逢ひ得ぬいづこに往か

んとするか、ギリシヤ人のうちに散りをる者に往きてギリシヤ人を教へんとするか。四六 その言に『なんぢら我を

尋ねん、然れど逢はざるべし、汝ら我がをる處に往くこと能はず』と云へるは何ぞや』

イ(太一二・二二 約五・

一〇)

ロ(利一九・二五 賽

一・二三 亞七・九

約八・一五 哥後

一〇・七 雅二・四

ハ路二三・一三を見よ

(約三・一)

ニ(約四・二九、

七、

ホ(約六・四二、

七・四

約九・

二九)

ト(約八・四二

チ(太一一・二七を見よ

リ(約六・四六

ヌ(約三・一七を見よ

ル(約七・三三、四四、

一〇・三九(太二一

・四六)

ヲ(約八・二〇(約七・

六)

リ(約八・三〇、一〇・

四二、一一・四五、

一二・二二、四二

(約二・二三)

カ(約七・二六

ヨ(約二・一一を見よ

タ(約七・三〇(太一二

・二四)

レ(太二六・五八を見よ

約七・四五、四六

約一二・三五、一三

・三三、一四・一九、

一六・一六、一九

ツ(約一六・五、一〇、一

七、二八、(約一四・

一二、二八、二〇・

一七)

ネ(約七・三六、八・二

ム(約一二・二〇、徒一

ナ(約八・二一、二三

ラ(雅一・一、彼前二・一

(詩一四七・二 賽

一一・一二、五六・

八番三・一〇)

ウ(約七・三四

四・一、一七・四、

一八・四 羅二・二

四・二六、二・九、

一〇

ウ(約七・三四

四・一、一七・四、

徒一

井利二三・三六 民二 ヤ(耳二・二八 約一・三三、一九・二) テ太一・一、二・五、六 ム太七・二八を見よ モ田二三・一 利一九  
 九・三五 尼八・一八 三三(一) フ太二・一、二を見よ 路二・四 ミ約七・一二 一六 申一七・六、  
 ノ(約四・一〇、一四、マ約一二・一六、二三、(約二・二二) ア路二・五、七 シ路二三・一三を見よ 一九・二五 彼一八  
 六・三五) 一三・三一、三二、コ約七・五二(約一・サ約一〇・一九(約九 約七・二六 一三(徒二三・三三)  
 才察四四・三、五五、一六・一四、一七・一 四六) エ(約二・四二) セ(察九・一、二)  
 一、五八・一一 ケ徒一・四、五(約二 エ米五・二(母後七・キ約七・三〇 ヒ約三・一、一九・三  
 〇・二二 徒二・四、一二) ユ約七・三二、四六 九

三七 祭の終の大なる日にイエス立ちて呼はりて言ひたまふ『人もし渴かば我に來りて飲め。三八 我を信する者

三九 は、聖書に云へるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』三九 これは彼を信する者の受けんとす

四〇 る御靈を指して言ひ給ひしなり。イエス未だ榮光を受け給はざれば、御靈いまだ降らざりしなり。四〇 此等の言を

四一 ききて群衆のうちの或人は『これ眞にかの預言者なり』といひ、四一 或人は『これキリストなり』と言ひ、又ある

四二 人は『キリスト争でガリラヤより出でんや、四二 聖書にキリストはダビデの裔またダビデの居りし村ベツレヘムよ

四三 り出づと云へるならずや』と言ふ。四三 斯くイエスの事によりて、群衆のうちに紛争おこりたり。四四 その中には、

四四 イエスを捕へんと欲する者もありしが、手出する者なかりき。

四五 而して下役ども、祭司長・パリサイ人らの許に歸りたれば、彼ら問ふ『なに故かれを曳き來らぬか』四六 下役

四七 ども答ふ『この人の語るとく語りし人は未だなし』四七 パリサイ人等これに答ふ『なんぢらも惑はされしか、

四八 司たち又はパリサイ人のうちに一人だに彼を信ぜし者ありや、四九 律法を知らぬこの群衆は詛はれたる者なり』

五〇 彼等のうちの一人にて曩にイエスの許に來りしニコデモ言ふ、五〇 『われらの律法は先その人に聴き、その爲す

五一 ところを知るにあらずば、審く事をせんや』五一 かれら答へて言ふ『なんぢもガリラヤより出でしか、查べ見よ、

五二 預言者はガリラヤより起る事なし』

五三 『斯ておのおの己が家に歸れり。

## 第八章

一 イエス、オリブ山にゆき給ふ。ニ夜明ごろ、また宮に入りしに、民みな御許に來りたれば、坐して教へ給ふ。三 爰に學者・パリサイ人ら、姦淫のとき捕へられたる女を連れきたり、眞中に立ててイエスに言ふ、四「師よ、この女は姦淫のをり、そのまま捕へられたるなり。五 モーセは律法に斯る者を石にて撃つべき事を我らに命じたるが、汝は如何に言ふか」六 斯く云へるはイエスを試みて訴ふる種を得んとてなり。イエス身を屈め、指にて地に物書き給ふ。七 かれら問ひて止まざれば、イエス身を起して「なんぢらの中、罪なき者まづ石を擲て」と言ひ、八 また身を屈めて地に物書きたまふ。九 彼等これを聞きて良心に責められ、老人をはじめ若き者まで一人一人いでゆき、唯イエスと中に立てる女とのみ遺れり。一〇 イエス身を起して、女のほかに誰も居らぬを見て言ひ給ふ「をんなよ、汝を訴へたる者どもは何處にをるぞ、汝を罪する者なきか」一一 女いふ「主よ、誰もなし」イエス言ひ給ふ「われも汝を罪せじ、往け、この後ふたたび罪を犯すな」

一二 斯てイエスまた人々に語りて言ひ給ふ「われは世の光なり、我に従ふ者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし」一三 パリサイ人ら言ふ「なんぢは己につきて證す、なんぢの證は眞ならず」一四 イエス答へて言ひ給ふ「われ自ら己につきて證すとも我が證は眞なり、我は何處より來り何處に往くを知る故なり。汝らは我が何處より來り、何處に往くを知らず。一五 なんぢらは肉によりて審く、我は誰をも審かず。一六 されど我もし審かば、我が審判は眞なり、我は一人ならず、我と我を遣し給ひし者と偕なるに因る。一七 また汝らの律法に、二人の證は眞なりと

イ太二一・一を見よ ホ申二二・三四 結一  
口(路二一・三八) 六・三八、四〇 ト可三・二を見よ  
ハ太二六・五五を見よ へ太二六・一、一九、チ約八・一〇  
太五・一 路四・二〇 三、二二・一八、三三(太七・一 羅二・二、  
約八・二〇 五、可八・一二、一二二)  
ニ利二〇・一〇 申二 〇・二、一二・一五 又申一七・七  
二・二二、二三 路一〇・二五、一二 路約八・七

ヲ(路二一・二四 約三 九・六 馬四・二) ソ約一三・三、一六、  
・一七、八・一五) ヨ(太五・一四 約一二 二八(約八・四二) ラ約五・三〇  
ワ約五・一四 彼前一 二六、三五、二二、 ツ(約七・二八、九、ム申一七・六 又太一  
・一五 一九) 二九) 本母前一六・七 約七  
カ約一・四、一二・三 タ(約五・三二) 二四  
五、四六(詩三六、レ約一八・三七 默一  
九 察四二・六、四 五、三・一四 ナ約三・一七を見よ

ウ約五・三七（約五五・九）  
 約七・二四を見よ  
 井約一四・七、一六（約八・二二）  
 三（約七・二八、可一・二四、四三）  
 八・五五、一四・九  
 路二・二一  
 ク約七・三〇  
 ヤ約七・三四を見よ  
 マ約八・二四  
 ケ（約七・三五）  
 フ（約三・三一）  
 コ約四・五  
 エ約一七・一四、一六  
 テ約八・二一  
 ア可一・三六、路二・八  
 約四・二六、キ（約八・四〇、一二、ミ約五・一九を見よ）  
 八・二八、一三・一  
 九（太二四・五）  
 サ約七・二八（約三・三三）  
 約八・二四を見よ  
 四九、一五・五  
 約三・一四、一二・シ（約四・三四）  
 約八・一六、一六・三三  
 約一五・七、約二九・二を見よ

一九八 録されたり。一八我みづから己につきて證をなし、我を遣し給ひし父も我につきて證をなし給ふ」一九ここに彼ら言

ふ『なんぢの父は何處にあるか』イエス答へ給ふ『なんぢらは我をも我が父をも知らず、我を知りしならば、我

が父をも知りしならん』二〇イエス宮の内にて教へし時これらの事を賽銭函の傍らにて語り給ひしが、彼の時いま

だ到らぬ故に、誰も捕ふる者なかりき。

二一 斯てまた人々に言ひ給ふ『われ往く、なんぢら我を尋ねん。されど己が罪のうちに死なん、わが往くところ

に汝ら來ること能はず』二二ユダヤ人ら言ふ『わが往く處に汝ら來ること能はず』と云へるは、自殺せんとて

か』二三イエス言ひ給ふ『なんぢらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我はこの世より出で

ず。二四之によりて我なんぢらは己が罪のうちに死なんと云へるなり。汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに

に死ぬべし』二五彼ら言ふ『なんぢは誰なるか』イエス言ひ給ふ『われは正しく汝らに告げ來りし所の者なり。

二六 われ汝らに就きて語るべきこと多し、而して我を遣し給ひし者は眞なり、我は彼に聽きしその

事を世に告ぐるなり』二七これは父をさして言ひ給へるを、彼らは悟らざりき。二八爰にイエス言ひ給ふ『なんぢら

人の子を擧げしのち、我の夫なるを知り、又わが己によりて何事をも爲さず、ただ父の我に教へ給ひしごとく、

此等のことを語りたるを知らん。二九我を遣し給ひし者は、我とともに在す。我つねに御意に適ふことを行ふに

よりて、我を獨おき給はず』三〇此等のことを語り給へるとき、多くの人々イエスを信じたり。

三二 爰にイエス己を信じたるユダヤ人に言ひたまふ『汝等もし常に我が言に居らば、眞にわが弟子なり。三三



フ太一〇・五を見よ    ア約一四・二三、一五    約八・五二來二・九    シ(約八・五〇)    セ(約八・四四)    一・二三    ハ(太二・二四)    リ出二〇・五  
 約七・二〇を見よ    二〇、一七・六    約八・四九    約七・三九を見よ    ス約一五・一〇(ハ、ハ約三・三を見よ)    へ約二二・三六    ス(約二・四)  
 約五・四一(約八・五五)    (約八・五五)    約八・五一    約一五・二二を見よ    五一    約二・一、一七・五、    ト太二三・七を見よ    ル約二・九、一二・  
 五四)    路二・二六、來一一    約八・五一    約八・一九    約八・三七、三九    二四    路二・二二約九、    三五(約七・三三  
 約三・三を見よ    五(太一六・二八)    (約四・二二)    約七・二九    太二三・一七    來    約二〇・三一、二二    三四(徒二八・四)    加六・一〇

四八 より出でぬに因る』<sup>四八</sup> ユダヤ人こたへて言ふ『なんぢはサマリヤ人にて惡鬼に憑かれたる者なりと、我らが云へ  
 四九 るは宜ならずや』<sup>四九</sup> イエス答へ給ふ『われは惡鬼に憑かれず、反つて我が父を敬ふ、なんぢらは我を輕んず。  
 五〇 我はおのれの榮光を求めず、之を求め、かつ審判し給ふ者あり、<sup>五一</sup> 誠にまことに汝らに告ぐ、人もし我が言を  
 五二 守らば、永遠に死を見ざるべし』<sup>五二</sup> ユダヤ人いふ『今ぞ、なんぢが惡鬼に憑かれたるを知る。アブラハムも預言者  
 五三 たちも死にたり、然るに汝は「人もし我が言を守らば、永遠に死を味はざるべし」と云ふ。』<sup>五三</sup> 汝われらの父  
 五四 アブラハムよりも大なるか、彼は死に、預言者たちも死にたり。汝はおのれを誰とするか』<sup>五四</sup> イエス答へたまふ  
 『我もし己に榮光を歸せば、我が榮光は空し。我に榮光を歸する者は我が父なり、即ち汝らが己の神と稱ふる者  
 五五 なり。』<sup>五五</sup> 然るに汝らは彼を知らず、我は彼を知る。もし彼を知らずと言はば、汝らの如く偽者たるべし。然れど  
 五六 我は彼を知り、且その御言を守る。』<sup>五六</sup> 汝らの父アブラハムは、我が日を見んとて樂しみ且これを見て喜べり』  
 五七 ユダヤ人いふ『なんぢ未だ五十歳にもならぬにアブラハムを見しか』<sup>五八</sup> イエス言ひ給ふ『まことに誠に汝らに  
 五九 告ぐ、アブラハムの生れいでぬ前より我は在るなり』<sup>五九</sup> 爰に彼ら石をとりてイエスに擲たんと爲たるに、イエス  
 隠れて宮を出で給へり。

# 第九章

一 イエス途往くとき、生れながらの盲人を見給ひたれば、二弟子たち問ひて言ふ『ラビ、この人の  
 盲目にて生れしは、誰の罪によるぞ、己のか、親のか』<sup>三</sup> イエス答へ給ふ『この人の罪にも親の罪  
 にもあらず、ただ彼の上に神の業の顯れん爲なり。』<sup>四</sup> 我を遣し給ひし者の業を我ら晝の間になさざる可からず。

六五 夜きたらん、その時は誰も働くこと能はず。五 われ世にをる間は世の光なり』六 かく言ひて地に睡し、睡にて泥  
七 をつくり、之を盲人の目にぬりて言ひ給ふ、七 『ゆきてシロアム（釋けば遣されたる者）の池にて洗へ』乃ちゆきて  
八 洗ひたれば、見ゆることを得て歸れり。八 ここに隣人および前に彼の乞食なるを見し者ども言ふ『この人は坐し  
九 て物乞ひゐたるにあらずや』九 或人は『夫なり』といひ、或人は『否、ただ似たるなり』といふ。かの者『われ  
二〇 は夫なり』と言ひたれば、二〇 人々いふ『さらば汝の目は如何にして開きたるか』二 答ふ『イエスといふ人、泥を  
二 につくり我が目に塗りて言ふ『シロアムに往きて洗へ』と、乃ち往きて洗ひたれば、物見ることを得たり』二 彼ら  
『その人は何處に居るか』と言へば『知らず』と答ふ。

二三 人々さきに盲目なりし者をパリサイ人らの許に連れきたる。二四 イエスの泥をつくりて其の人の目をあけし  
二五 日は安息日なりき。二五 パリサイ人らも亦いかにして物見ることを得しかと問ひたれば、彼いふ『かの人わが目に  
二六 泥をぬり、我これを洗ひて見ゆることを得たり』二六 パリサイ人の中なる或人は『かの人、安息日を守らぬ故に、  
神より出でし者にあらず』と言ひ、或人は『罪ある人いかで斯る徴をなし得んや』と言ひて互に相争ひたり。  
二七 爰にまた盲目なりし人に言ふ『なんぢの目をあけしに因り、汝は彼に就きて如何にいふか』彼いふ『預言者な  
二八 り』ハユダヤ人ら彼が盲人なりしに見ゆるやうになりしことを未だ信ぜずして、目の開きたる人の兩親を呼び、  
二九 問ひて言ふ『これは盲目にて生れしと言ふ汝らの子なりや、然らば今いかにして見ゆるか』二〇 兩親こたへて言  
三 ふ『かれの我が子なることと盲目にて生れたる事とを知る。三 されど今いかにして見ゆるかを知らず、又その目

イ約八・一二を見よ  
ヨ可七・三三、八、ホ（徒三・二、一〇）  
二二 へ約九・七を見よ  
ハ路一三・四を見よ  
ト約五・九  
チ約九・一〇

リ（太二・二、二）約七・  
一九）  
又約二・一一を見よ  
カ約一・一九を見よ  
ル約六・五二、七・四  
約九・二二  
三、一〇・一九

ヨ（約七・一三）  
タ（約七・四五—五二）  
レ（約一二・四二）  
一〇・九

ソ約一二・四二、一六 五 賽四二・一二 ラ約九・一八、二四 ノ約八・一四  
・二 (路六・二二) 耶一三・一六 默一 ム約九・一五 オ(約三・一〇)  
約九・三四 一・二三 (路一七・ウ約五・二五を見よ) ク(可六・六 約一二・  
ツ約九・二一 一八 徒一二・二三) 井(約五・四五 羅二・ 三七)  
ネ書七・一九、母前六 ナ約九・一六 ヤ伯二七・八、九、三五 九 賽一・一五 雅 フ約九・三五 (約九・  
・一三 詩三四・一五、 五・二六、一八 二二 約一〇) サ太八・二を見よ  
一六、六六・一八、 マ約九・一六 (約三・ コ約九・三四を見よ キ約三・一九、五・二  
一四五・一九、二〇 二) エ太八・二〇を見よ 二、二七  
一五・二九、二八 ケ(約九・二二) ナ(羅一〇・四) ユ路四・一八  
九 賽一・一五 雅 フ約九・三五 (約九・ ア約四・二六

三 をあけしは誰なるか、我らは知らず、彼に問へ、年長けたれば自ら己がことを語らん」三 兩親のかく言ひしは、  
ユダヤ人を懼れたるなり。ユダヤ人ら相議りて「若しイエスをキリストと言ひ顯す者あらば、除名すべし」と定  
めたるに因る。三 兩親の「かれ年長けたれば彼に問へ」と云へるは、此の故なり。四 かれら盲目なりし人を再び  
呼びて言ふ「神に榮光を歸せよ、我等はかの人の罪人たるを知る」五 答ふ「かれ罪人なるか、我は知らず、ただ  
一つの事をしる、即ち我さきに盲目たりしが、今見ゆることを得たる是なり」六 彼ら言ふ「かれは汝に何をなし  
しか、如何にして目をあけしか」七 答ふ「われ既に汝らに告げたれど聽かざりき。何ぞまた聽かんとするか、汝  
らもその弟子とならんことを望むか」八 かれら罵りて言ふ「なんぢは其の弟子なり、我等はモーセの弟子なり、  
九 モーセに神の語り給ひしことを知れど、此の人の何處よりかを知らず」三〇 答へて言ふ「その何處よりかを知ら  
ずとは怪しき事なり、彼わが目をあけしに。三一 神は罪人に聽き給はねど、敬虔にして御意をおこなふ人に聽き給  
ふことを我らは知る。三二 世の太初より、盲目にて生れし者の目をあけし人あるを聞きし事なし。三三 かの人もし神  
より出でずば、何事をも爲し得ざらん」三四 かれら答へて「なんぢ全く罪のうちに生れながら、我らを教ふるか」  
と言ひて、遂に彼を追ひ出せり。

三五 イエスその追ひ出されしことを聞き、彼に逢ひて言ひ給ふ「なんぢ人の子を信するか」三六 答へて言ふ「主  
よ、それは誰なる乎、われ信ぜまほし」三七 イエス言ひ給ふ「なんぢ彼を見たり、汝と語る者は夫なり」三八 爰に、  
かれ「主よ、我は信ず」といひて拜せり。三九 イエス言ひ給ふ「われ審判の爲にこの世に來れり。見えぬ人は見

四〇 え、見ゆる人は盲目とならん爲なり』四〇 パリサイ人の中イエスと共に居りし者、これを聞きて言ふ『我らも盲目なるか』四一 イエス言ひ給ふ『もし盲目なりしならば、罪なかりしならん、然れど見ゆと言ふ汝らの罪は遺れり』

第一〇章

一 『まことに誠に汝らに告ぐ、羊の檻に門より入らずして、他より越ゆる者は、盗人なり、強盗なり。二 門より入る者は、羊の牧者なり。三 門守は彼のために開き、羊はその聲をきき、彼は己の羊の名を呼びて牽きいだす。四 悉とく其の羊をいだしし時、これに先だちゆく、羊その聲を知るによりて従ふなり。五 他の者には従はず、反つて逃ぐ、他の者どもの聲を知らぬ故なり』六 イエスこの譬を言ひ給へど、彼らその何事をかたり給ふかを知らざりき。

七 この故にイエス復いひ給ふ『まことに誠に汝らに告ぐ、我は羊の門なり。ハすべて我より前に來りし者は、盗人なり、強盗なり、羊は之に聽かざりき。九 我は門なり、おほよそ我によりて入る者は救はれ、かつ出入をなし、草を得べし。一〇 盗人のきたるは盗み、殺し、亡さんとするの他なし。わが來るは羊に生命を得しめ、かつ豊に得しめん爲なり。二 我は善き牧者なり、善き牧者は羊のために生命を捨つ。三 牧者ならず、羊も己がものならぬ雇人は、豺狼のきたるを見れば羊を棄てて逃ぐ、——豺狼は羊をうばひ且ちらす——三 彼は雇人にてその羊を顧みぬ故なり。四 我は善き牧者にして、我がものを知り、我がものは我を知る、五 父の我を知り、我の父を知るが如し、我は羊のために生命を捨つ。六 我には亦この檻のものならぬ他の羊あり、之をも導かざるを得ず、彼らは我が聲をきかん、遂に一つの群ひとりの牧者となるべし。七 之によりて父は我を愛し給ふ、それは我ふた

イ太一三・一三、一五 ニ(彼二六・一二) 六・二七 七(約一〇・九) ヲ約三・三を見よ ヲ約三・三を見よ 六・二七 七(約一〇・九) ヲ約三・三を見よ  
ロ(羅二・二九) へ約一〇・八 ヲ約一〇・三を見よ ヲ約一〇・一(耶二三) 二三・四〇・一一 黙七・一七 ツ約一〇・二七 提後 ム(約一・五二) 一  
ハ(約一五・二二) 二 ト約一〇・一二 九 ル(約一六・二五、二九) 二・二 結三四・二 耶三・一五 結三四 レ約一〇・一五、一七、二・一九 七・二〇、二一 弗二  
四) チ約一〇・四、五、一 彼後二・二二 一・一〇 二・一六、二三 一八 約三三・一六 太二一・二七 二・三十一 八 彼前

二二五 井(太二六・五三約二 オ約七・四三 (約九・三三・三三) ヲ(約八・五六・五八) サ(約一七・一四・二二) ム約一七・二二・二三 三四、一五二五  
 ウ(結三四・二三、三 一九・五・二六) ケ徒三・一一、五・一 エ約五・三六を見よ ミ約八・五九を見よ 羅三・一九 五・二五  
 七・二四) ノ(約一四・三一、一 ク約七・二〇を見よ 二) 約一〇・三八 約一七・二・三約壹 シ利二四・一六 四・二二) 五・一〇 腓二・八 ヤ(可三・二二) フ路三・二六七 (約 テ(約八・四七) 二・二五、五・二二) エ約五・一八 五・二六 六・二六  
 來五・八) マ(出四・一一 約九・一六・五) ア約一〇・四・一六 ユ(約六・三七・三九) ヒ(約八・一七、一二、

八たび生命を得んために生命を捨つる故なり。一八人これを我より取るにあらず、我みづから捨つるなり。我は之を  
 すつる權あり、復これを得る權あり、我この命令をわが父より受けたり』

一九これらの言によりて復ユダヤ人のうちに紛争おこり、二〇その中なる多くの者いふ『かれは惡鬼に憑かれて  
 氣狂へり、何ぞ之にきくか』二一他の者ども言ふ『これは惡鬼に憑かれたる者の言にあらず、惡鬼は盲人の目を  
 あけ得んや』

二三その頃エルサレムに宮潔の祭あり、時は冬なり。二三イエス宮の内、ソロモンの廊を歩みたまふに、二四ユダ  
 ヤ人ら之を取圍みて言ふ『何時まで我らの心を惑はしむるか、汝キリストならば明白に告げよ』二五イエス答へ給

ふ『われ既に告げたれど汝ら信ぜず、わが父の名によりて行ふわざは、我に就きて證す。二六されど汝らは信ぜず、  
 我が羊ならぬ故なり。二七わが羊はわが聲をきき、我は彼らを知り、彼らは我に従ふ。二八我かれらに永遠の生命  
 を與ふれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、又かれらを我が手より奪ふ者あらじ。二九彼らを我にあたへ給ひし

我が父は、一切のものよりも大なれば、誰にても父の御手よりは奪ふこと能はず。三〇我と父とは一つなり』三一ユ  
 ダヤ人また石を取りあげてイエスを撃たんとす。三二イエス答へ給ふ『われは父によりて多くの善き業を汝らに示

したり、その孰の業ゆゑに我を石にて撃たんとするか』三三ユダヤ人こたふ『なんぢを石にて撃つは善きわざの故  
 ならず、瀆言の故にして、汝人なるに己を神とする故なり』三四イエス答へ給ふ『なんぢらの律法に「われ言ふ、  
 汝らは神なり」と録されたるに非ずや。三五かく神の言を賜りし人々を神と云へり。聖書は廢るべきにあらず、

ヨハ 承 傳 一〇・一八——三五 二〇五



ウ(路一三・三三約九  
・四、一二・三五) 約一・二一・一三 二 希羅語にて双 マ約二一・三九 三二 (哥後一・三 一 約九・一五) 七太一六・一六(路二  
・四、一二・三五) 徒一三・三六 哥前 見の意 ケ約二一・二を見よ 一七 (路一〇・三八・四 二 約二一・四、五・二六 二二) 二二  
井(約二一・三三) 撒前四・三三・一五 一八 路六・一五 約二一・八、三二、 二 (路一〇・三八・四 二 約二一・四、五・二六 二二) 二二  
ノ但(二・二二太二七 五二) オ(太九・二四 路八、 約一四・五、二〇、 三三、三六 ア(路一〇・三八・四 二 約二一・四、五・二六 二二) 二二  
・五二 可五・三九 ク約二〇・二四、二二 二 徒一・二三 エ伯二・二一 約二一 サ約二一・二を見よ 三九、四〇 徒二四 エ約六・一四 ス約二一・二〇

二 後いひ給ふ『われらの友ラザロ眠れり、されど我よび起さん爲に往くなり』三弟子たち言ふ『主よ、眠れるならば癒ゆべし』三イエスは彼が死にたることを言ひ給ひしなれど、弟子たちは寝ねて眠れるを言ひ給ふと思へるなり。二四爰にイエス明白に言ひ給ふ『ラザロは死にたり。二五我かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、汝等をして信ぜしめんとてなり。然れど我ら今その許に往くべし』二六デドモと稱ふるトマス、他の弟子たちに言ふ『われらも往きて彼と共に死ぬべし』

一七さてイエス來り見給へば、ラザロの墓にあること、既に四日なりき。一八ベタニヤはエルサレムに近くして、二十五丁ばかりの距離なるが、一九數多のユダヤ人、マルタとマリヤとをその兄弟の事につき慰めんとて來れり。二〇マルタはイエス來給ふと聞きて出で迎へたれど、マリヤはなほ家に坐し居たり。二一マルタ、イエスに言ふ『主よ、もし此處に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを。二三されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給ふとも、神は與へ給はん』二三イエス言ひ給ふ『なんぢの兄弟は甦へるべし』二四マルタ言ふ『をはりの日、復活のときに甦へるべきを知る』二五イエス言ひ給ふ『我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。二六凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。汝これを信するか』二七彼いふ『主よ然り、我なんぢは世に來るべきキリスト、神の子なりと信ず』二八かく言ひて後ゆきて窺にその姉妹マリヤを呼びて『師きたりて汝を呼びたまふ』と言ふ。二九マリヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。三〇イエスは未だ村に入らず、尙マルタの迎へ

し處に居給ふ。三マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎かんとて墓に往くと思ひて後に隨へり。三斯てマリヤ、イエスの居給ふ處にいたり、之を見てその足下に伏し「主よ、もし此處に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを」と言ふ。三イエスかれが泣き居り、共に來りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて言ひ給ふ、三「かれを何處に置きしか」彼ら言ふ「主よ、來りて見給へ」三イエス涙をながし給ふ。三六爰にユダヤ人ら言ふ「視よ、いかばかり彼を愛せしぞや」三七その中の或者ども言ふ「盲人の目をあけし此の人にして、彼を死なざらしむること能はざりしか」三八イエスまた心を傷めつつ墓にいたり給ふ。墓は洞にして石を置きて塞げり。三九イエス言ひ給ふ「石を除けよ」死にし人の姉妹マルタ言ふ「主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり」四〇イエス言ひ給ふ「われ汝に、もし信ぜば神の榮光を見んと言ひしにあらずや」四一ここに人々、石を除けたり。イエス目を舉げて言ひたまふ「父よ、我にきき給ひしを謝す。四二常にきき給ふを我は知る。然るに斯く言ふは、傍らに立つ群衆の爲にして、汝の我を遣し給ひしことを之に信ぜしめんとてなり」四三斯く言ひてのち、聲高く「ラザロよ、出で來たれ」と呼はり給へば、四四死にしもの布にて足と手とを卷かれたるまま出で來る、顔も手拭にて包まれたり。イエス「これを解きて往かしめよ」と言ひ給ふ。四五斯てマリヤの許に來りて、イエスの爲し給ひし事を見たる多くのユダヤ人、かれを信じたりしが、四六或者はパリサイ人に往きて、イエスの爲し給ひし事を告げたり。

|            |            |            |            |            |             |
|------------|------------|------------|------------|------------|-------------|
| イ約一一・二九    | 三・二二       | 五・四六路二四・二  | 約二〇・二      | ナ(太二六・一二可一 | 一・二七、二八)    |
| ロ約一一・二九、三三 | チ(路一九・四二)  | 約二〇・二      | レ約一七・一(徒七・ | 四・八路二四・一二  | 并約二・二三      |
| ハ約一一・二を見よ  | リ約一一・二九を見よ | カ約一一・一七    | 五五)        | 約一九・四〇、二〇  | ノ約七・三一を見よ   |
| ニ約一一・二一    | ヌ(約一一・三三)  | ヨ約一一・四、二三  | ソ太一一・二五を見よ | 五)         | オ約一一・五七(約七・ |
| ホ約一一・二九を見よ | ル約九・七      | 二六         | ツ(約一二・三〇、一 | ラ約五・二五     | ・三二、四五)     |
| ヘ約一一・三八    | テ約一一・三三    | タ(太二七・六〇可一 | 七・二二)      | ム(約二〇・七)   |             |
| ト(約一二・二七、一 | ワ(太二七・六〇可一 | 五・四六路二四・二  | ネ約三・一七を見よ  | ウ約一一・一九    | (約          |

  

|             |           |           |
|-------------|-----------|-----------|
| ク約一一・五七(約七・ | ヤ太五・二二を見よ | マ約二・二一を見よ |
|-------------|-----------|-----------|

ケ(太二四・二五) テ祭四九・六 約登二 九、三〇・七 喇二 ミ太二六・二 可一四 〇・二七、二八(約 モ一・一八(太二六・六 (約一二・一二、二 口路一〇・三八を見よ  
 フ約一一・五一、一八 ア約一〇・一六 六三 尼七・六五) 一 路二二・二 約 一八・二八 徒二 一三 可一四・三 〇) ハ約一一・二を見よ  
 ・二三 コ太二六・三 サ(出二八・三〇 民二 キ太二六・四 一二・一、一三・一 二四) 一九 路七・三七 一 太二二・一七を見よ 二可一四・三  
 エ約一八・一四 七・二 母前二三 メ代下一三・一九 シ民九・一〇 代下三 七約一一・四七を見よ セ約一一・五五を見よ 四三、四四) イ約一一・一(約一一 水約六・七一

四七 ここに祭司長・パリサイ人ら議會を開きて言ふ『われら如何に爲すべきか、此の人おほくの徴を行ふな  
 四八 り。もし彼をこのまま捨ておけば、人々みな彼を信ぜん、而して 로마人きたりて、我らの土地と國人とを奪は  
 四九 ん』四九 その中の一人にて此の年の大祭司なるカヤパ言ふ『なんぢら何をもち知らず。五〇 ひとりの人、民のために死  
 五二 にて、國人すべての滅びぬは、汝らの益なるを思はぬなり』五一 これは己より云へるに非ず、この年の大祭司なれ  
 五三 ば、イエスの國人のため、五二 又ただに國人の爲のみならず、散りたる神の子らを一つに集めん爲に死に給ふこと  
 五三 を預言したるなり。五三 彼等この日よりイエスを殺さんと議れり。  
 五四 されば此の後イエス顯にユダヤ人のなかを歩み給はず、此處を去りて荒野にちかき處なるエフライムとい  
 五五 ふ町に往き、弟子たちと偕に其處に留りたまふ。五五 ユダヤ人の過越の祭近づきたれば、多くの人々身を潔めんと  
 五六 て、祭のまへに田舎よりエルサレムに上れり。五六 彼らイエスをたづね、宮に立ちて互に言ふ『なんぢら如何に思  
 五七 ふか、彼は祭に來らぬか』五七 祭司長・パリサイ人らは、イエスを捕へんとて、その在處を知る者あらば、告げ出  
 づく預て命令したりしなり。

## 第二章

一 過越の祭の六日前に、イエス、ベタニヤに來り給ふ、ここは死人の中より甦へらせ給ひしラザロ  
 二 の居る處なり。二 此處にてイエスのために饗宴を設け、マルタは事へ、ラザロはイエスと共に席に  
 三 著ける者の中にあり。三 マリヤは價高き混りなきナルドの香油一斤を持ち來りて、イエスの御足にぬり、己が  
 四 頭髮にて御足を拭ひしに、香油のかをり家に満ちたり。四 御弟子の一人にてイエスを賣らんとするイスカリオテ



一、二、三、一七、半約一四・三、一七、メ約一三・二一（太二・二九、九・三九）  
 ヤ約七・三五を見よ  
 ヤ約一・四四を見よ  
 エ約三・三を見よ  
 テ約一・四四を見よ  
 ヲ（太二・四五）  
 ア太一・三九を見よ  
 四・三五、四一約一  
 一、二、三、一七、半約一四・三、一七、メ約一三・二一（太二・二九、九・三九）  
 ヤ約七・三五を見よ  
 ヤ約一・四四を見よ  
 エ約三・三を見よ  
 テ約一・四四を見よ  
 ヲ（太二・四五）  
 ア太一・三九を見よ  
 四・三五、四一約一  
 一、二、三、一七、半約一四・三、一七、メ約一三・二一（太二・二九、九・三九）  
 ヤ約七・三五を見よ  
 ヤ約一・四四を見よ  
 エ約三・三を見よ  
 テ約一・四四を見よ  
 ヲ（太二・四五）  
 ア太一・三九を見よ  
 四・三五、四一約一

二〇 禮拜せんとて祭に上りたる者の中に、ギリシヤ人數人ありしが、ニガリラヤなるベツサイダのピリポに來り、請ひて言ふ『君よ、われらイエスに謁えんことを願ふ』ニピリポ往きてアンデレに告げ、アンデレとピリポと共に往きてイエスに告ぐ。ニイエス答へて言ひ給ふ『人の子の榮光を受くべき時きたれり。ニ誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麥、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。ニ己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。ニ人もし我に事へんとせば、我に従へ、わが居る處に我に事ふる者もまた居るべし。人もし我に事ふることをせば、我が父これを貴び給はん。ニ今わが心騒ぐ、我なにを言ふべきか。父よ、この時より我を救ひ給へ、されど我この爲にこの時に到れり。ニ父よ、御名の榮光をあらはし給へ』爰に天より聲いでて言ふ『われ既に榮光をあらはしたり、復さらに顯さん』ニ傍らに立てる群衆これを聞きて『雷霆鳴れり』と言ひ、ある人々は『御使かれに語れるなり』と言ふ。ニイエス答へて言ひ給ふ『この聲の來りしは、我が爲にあらず、汝らの爲なり。ニ今この世の審判は來れり、今この世の君は逐ひ出さるべし。ニ我もし地より擧げられなば、凡ての人をわが許に引きよせん』ニかく言ひて己が如何なる死にて死ぬるかを示し給へり。ニ群衆こたふ『われら律法によりて、キリストは永遠に存へ給ふと聞きたるに、汝いかなれば人の子は擧げらるべしと言ふか、その人の子とは誰なるか』ニイエス言ひ給ふ『なほ暫し光は汝らの中にあり、光のある間に歩みて暗黒に追及かれぬやうに爲よ、暗き中を歩む者は往方



ヤ(約六・七〇、一三・二〇・一 王上二二 ユ約一三・四 ス(提前五・一〇) (二五) 約六・七〇、一五・  
 (二七) エ路七・四四を見よ (一六) ヲ約一・二八を見よ エ(彼前五・三) ハ約六・七〇、一五・  
 マ約六・七一を見よ テ(約一三・一二一一 サ約一五・三 ヲ約一・二八を見よ イ路二・二八 雅一 二約一七・一二、一九  
 ク約三・三五を見よ (五) キ約六・六四を見よ 腓二・二一 (哥前 七約三・三を見よ 二約一七・一二、一九  
 フ約八・四二を見よ ア(申一二・一二母後 (約一三・二二) 一三・三) セ太一〇・二四を見よ 一二七) 二五、一八・三二) 三)

二 者を愛して極まで之を愛し給へり。ニ 夕餐のとき惡魔、早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを  
 三 賣らんとする思を入れたるが、三 イエス父が萬物をおのが手にゆだね給ひしことと、己の神より出でて神に到る  
 五四 ことを知り、四 夕餐より起ちて上衣をぬぎ、手巾をとりて腰にまとひ、五 尋で鹽に水をいれて、弟子たちの足  
 六 をあらひ、纏ひたる手巾にて之を拭ひはじめ給ふ。六 斯てシモン・ペテロに至り給へば、彼いふ『主よ、汝わが  
 八七 足を洗ひ給ふか』セ イエス答へて言ひ給ふ『わが爲すことを汝いまは知らず、後に悟るべし』ハ ペテロ言ふ  
 九 『永遠に我が足をあらひ給はざれ』 イエス答へ給ふ『我もし汝を洗はずば、汝われと關係なし』九 シモン・ペテ  
 一〇 ロ言ふ『主よ、わが足のみならず、手をも頭をも』一〇 イエス言ひ給ふ『すでに浴したる者は足のほか洗ふを要せ  
 二 ず、全身きよきなり。斯く汝らは潔し、されど悉くは然らず』二 これ己を賣る者の誰なるを知りたまふ故に  
 『ことごとくは潔からず』と言ひ給ひしなり。  
 三 彼らの足をあらひ、己が上衣をとり、再び席につきて後いひ給ふ『わが汝らに爲したることを知るか。  
 四 三 なんぢら我を師また主となふ、然か言ふは宜なり、我は是なり。一四 我は主また師なるに、尙なんぢらの足を  
 一五 洗ひたれば、汝らも互に足を洗ふべきなり。一五 われ汝らに模範を示せり、わが爲しごとく、汝らも爲さんため  
 一六 なり。一六 誠にまことに汝らに告ぐ、僕はその主よりも大ならず、遣されたる者は之を遣す者よりも大ならず。  
 一七 一七 汝等これらの事を知りて之を行はば幸福なり。一八 これ汝ら凡ての者につきて言ふにあらず、我はわが選びたる  
 者どもを知る。されど聖書に「我とともにパンを食ふ者、われに向ひて踵を擧げたり」と云へることは、必ず成就

二九  
二〇  
すべきなり。一九今その事の成らぬ前に之を汝らに告ぐ、事の成らん時、わが夫なるを汝らの信ぜんためなり。二〇  
誠にまことに汝らに告ぐ、わが遣す者を受くる者は我をうくるなり。我を受くる者は我を遣し給ひし者を受くるなり。』

井約一五・二二 約登 來一三・一 彼前二 ヤ約二一・二八、一九 一四・三〇  
 二・七、八、三・二三 二二 約登四・七 マ三七、三八、二六、 二約一四・二七 (約  
 四・二二 約登五 (大五・四四) 三三三・三五、可一四 一六・二二、二四)  
 (約一五・一七 約登 才弗五・二 約登四・ 二九一・三一 路二 エ約一三・三三、三六  
 三・一一) 一〇・一一 二・三三、三四 (來六・二〇)  
 ノ利一九・一八、加五・ 夕約一三・三三 (約一 ケ約三・三を見よ ユ約一・二四を見よ  
 一四 撒前四・九 四・三、一六・五) フ約一八・二七 (可 ア約一二・二六を見よ  
 一・二五 (約登五 (約一・一四)

三四 しごとく今、汝らにも然か言ふなり。三三 われ新しき誠命を汝らに與ふ。なんぢら相愛すべし。わが汝らを愛せし  
 ごとく、汝らも相愛すべし。三五 互に相愛する事をせば、之によりて人みな汝らの我が弟子たるを知らん』

三六 シモン・ペテロ言ふ『主よ、何處にゆき給ふか』イエス答へ給ふ『わが往く處に、なんぢ今は從ふこと能  
 はず。されど後に從はん』三七 ペテロ言ふ『主よ、いま從ふこと能はぬは何故ぞ、我は汝のために生命を棄てん』

三八 イエス答へ給ふ『なんぢ我がために生命を棄つるか、誠にまことに汝に告ぐ、なんぢ三度われを否むまでは、  
 雞鳴かざるべし』

## 第一四章

一 『なんぢら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。二 わが父の家には住處おほし、然らずば  
 我かねて汝らに告げしならん。われ汝等のために處を備へに往く。三 もし往きて汝らの爲に處を備  
 へば、復きたりて汝らを我がもとに迎へん、わが居るところに汝らも居らん爲なり。四 汝らは我が往くところに  
 至る道を知る』五 トマス言ふ『主よ、何處にゆき給ふかを知らず、争でその道を知らんや』六 イエス彼に言ひ給  
 ふ『われは道なり、眞理なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。七 汝等もし我を知り  
 たらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』八 ピリポ言ふ『主よ、父を我らに示し  
 給へ、然らば足れり』九 イエス言ひ給ふ『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し  
 者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言ふか。一〇 我の父に居り、父の我に居給ふことを信ぜぬ

二 か。わが汝等にいふ言は己によりて語るにあらず、父われに在して御業をおこなひ給ふなり。二 わが言ふことを信ぜよ、我は父にをり、父は我に居給ふなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。三 誠にまことに汝らに告ぐ、我を信する者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。三 汝らが我が名によりて願ふことは、我みな之を爲さん、父、子によりて榮光を受け給はんためなり。一四 何事にても我が名によりて我に願はば、我これを成すべし。一五 汝等もし我を愛せば、我が誠命を守らん。一六 われ父に請はん、父は他に助主をあたへて、永遠に汝らと偕に居らしめ給ふべし。一七 これは眞理の御霊なり、世はこれを受くること能はず、これを見ず、また知らぬに因る。なんぢらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給ふべければなり。一八 我なんぢらを遺して孤兒とはせず、汝らに來るなり。一九 暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。二〇 その日には、我わが父に居り、なんぢら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。二一 わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顯すべし。二二 イスカリオテならぬユダ言ふ『主よ、何故おのれを我らに顯して、世には顯し給はぬか』二三 イエス答へて言ひ給ふ『人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住處を之とともに爲ん。二四 我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くところの言は、わが言にあらず、我を遣し給ひし父の言なり。』

イ約一四・二四、五、  
一九 太七・七を見よ  
二二・三、五・三約貳  
一三 約壹二・二七  
一三 約壹二・二七  
レ約一六・二三、二六  
二二・三、一六・二七  
ウ約一四・一五、二三  
弗三・一七 約壹二  
口約五・三六を見よ  
ト約一三・三一を見よ  
又約一四・二六、一五  
四・六、五・七  
ソ約一〇・三八を見よ  
ナ(出三三・一八、一  
五・三 約貳六)  
二二・三  
ハ約三・三を見よ  
チ(約一五・一六、一  
二六、一六・七  
ワ約一四・三、二八  
ラ路六・一六 徒一・  
井約八・五一を見よ  
ク約一四・二三を見よ  
ヤ約七・二六、一四、  
二約五・二〇(約四・  
六・二三、二四)  
約壹二・一(約七・  
三九)  
ヨ約一六・二六、二二  
五・三 約貳六)  
ム(徒一〇・四〇、四  
ノ約一四・二一を見よ  
オ哥後六・一六を見よ  
ホ(約七・三三、一四、  
(約一五・一〇 約壹  
ル一五・二六、一六、  
タ(約六・五七)  
ネ 彼八・一七 約一四  
一)

マ約一四・一六をよ 約二二・二〇、二七 テ約一四・一  
 ケ(路二四・四九約一 コ約二二・二二を見よ ア約一四・三、一八  
 ・三三)一五・二六、エ約二〇・一九を見よ サ約一四・二一、四  
 一六・七徒二・三三 約一六・三三、四三 キ約一四・一二を見よ エ(約一〇・一八、一  
 フ約一六・一三、一四 ・二五(腓四・七) ユ(約一〇・二九) 二・四九  
 ヒ(約一三・一 及び 二一・三三、四一) 二六  
 一八・二) セ(太一五・二三哥前 イ四・七 約六・五六  
 一八・二) 一五 三・九) を見よ 約二・六  
 賽五・一七 結一 ス約一三・一〇 ハ約一五・一六 ト約三・三三、一七、  
 九・一〇、一四 太 (約一七・一七弗五 二六七・七を見よ 約 二二・二四、二六  
 太 約一七・一七弗五 二六七・七を見よ 約 二二・二四、二六  
 太 約一七・一七弗五 二六七・七を見よ 約 二二・二四、二六

二五 此等のことは我なんぢらと偕にありて語りしが、二六 助主、即ちわが名によりて父の遣したまふ聖霊は、汝  
 二七 らに萬の事ををしへ、又すべて我が汝らに言ひしことを思ひ出さしむべし。二七 われ平安を汝らに遺す、わが平安  
 二八 を汝らに與ふ。わが與ふるは世の與ふる如くならず、汝ら心を騒がすな、また懼るな。二八 われ往きて汝らに來る  
 二九 なり」と云ひしを汝ら既に聞けり。もし我を愛せば父にわが往くを喜ぶべきなり、父は我よりも大なるに因る。  
 三〇 今その事の成らぬ前に、これを汝らに告げたり、事の成らんとし汝らの信ぜんためなり。三〇 今より後われ汝ら  
 三一 と多く語らじ、この世の君きたる故なり。彼は我に對して何の權もなし、三一 されど斯くなるは、我の、父を愛し  
 三二 父の命じ給ふところに遵ひて行ふことを世の知らん爲なり。起きよ、率ここを去るべし。

# 第一章

一 我は眞の葡萄の樹、わが父は農夫なり。二 おほよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、  
 三 果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん爲に之を潔めたまふ。三 汝らは既に潔し、わが語りたる言  
 四 に因りてなり。四 我に居れ、さらば我なんぢらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能はぬごとく、  
 五 汝らも我に居らずば亦然り。五 我は葡萄の樹、なんぢらは枝なり。人もし我にをり、我また彼にをらば、多くの  
 六 果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事をも爲し能はず。六 人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて  
 七 枯る、人々これを集め火に投入れて焼くなり。七 汝等もし我に居り、わが言なんぢらに居らば、何にても望に隨  
 八 ひて求めよ、然らば成らん。八 なんぢら多くの果を結ばば、わが父は榮光を受け給ふべし、而して汝等わが弟子  
 九 とならん。九 父の我を愛し給ひしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。一〇 なんぢら若し、わが誠命を



マ約五・七  
ケ路一・二を見よ  
コ約一五・一八―二七  
エ太一・一六を見よ  
サ約四・二二を見よ  
テ約九・二二を見よ  
ア徒二六・九―一  
（賽六六・五 默六・ユ（約一三・一九）  
メ約七・三三を見よ  
シ約一六・二二  
（約一四・二）  
五二・一七・三一  
（約一四・一七）  
ハ約一四・一七を見よ  
ニ約七・三九を見よ  
（約一六・二二）  
イ約一二・三一を見よ  
ロ約一二・三一を見よ  
ヘ約七・三三を見よ  
ト一六・二四  
（約一四・一七）  
チ約一六・二二

二六 「と録したる言の成就せん爲なり。二六 父の許より我が遣さんとする助主、即ち父より出づる眞理の御靈のきたらんとき、我につきて證せん。二七 汝等もまた初より我とともに在りたれば證するなり。」

# 第一章

一 我これらの事を語りたるは、汝らの蹟かざらん爲なり。二 人なんぢらを除名すべし、然のみならず、汝らを殺す者みな自ら神に事ふと思ふとき來らん。三 これらの事をなすは、父と我とを知らぬ故なり。四 我これらの事を語りたるは、時いたりて我が斯く言ひしことを汝らの思ひいでん爲なり。初より此等のことを言はざりしは、我なんぢらと偕に在りし故なり。五 今われを遣し給ひし者にゆく、然るに汝らの中、たれも我に「何處にゆく」と問ふ者なし。六 唯これらの事を語りしによりて、憂なんぢらの心にみたり。七 されど、われ實を汝らに告ぐ、わが去るは汝らの益なり。我さらずば助主なんぢらに來らじ、我ゆかば之を汝らに遣さん。ハ かれ來らんとき世をして罪につき、義につき、審判につきて、過てるを認めしめん。九 罪に就きてとは、彼ら我を信ぜぬに因りてなり。一〇 義に就きてとは、われ父にゆき、汝ら今より我を見ぬに因りてなり。二 審判に就きてとは、此の世の君さばかるるに因りてなり。三 我なほ汝らに告ぐべき事あまたあれど、今なんぢら得耐へず。四 然れど彼すなはち眞理の御靈きたらん時、なんぢらを導きて眞理をことごとく悟らしめん。かれ己より語るにあらず、凡そ聞くとこの事を語り、かつ來らんとする事どもを汝らに示さん。一四 彼はわが榮光を顯さん、それは我がものを受けて汝らに示すべければなり。一五 すべて父の有ち給ふものは我がものなり、此の故に我がものを受けて汝らに示さんと云へるなり。一六 暫くせば汝ら我を見ず、また暫くして我を見るべし。一七 爰に弟子

たちのうち或者たがひに言ふ『暫くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし』と言ひ、かつ「父に往くによりて」と言ひ給へるは、如何なることぞ」<sup>(一)</sup>「復いふ『この暫くとは如何なることぞ、我等その言ひ給ふところを知らず』<sup>(二)</sup>「イエスその問はんとおもへるを知りて言ひ給ふ『なんぢら「暫くせば我を見ず、また暫くして我を見るべし」と我が言ひしを尋ねあふか。』<sup>(三)</sup>誠にまことに汝らに告ぐ、なんぢらは泣き悲しみ、世は喜ばん。汝ら憂ふべし、然れどその憂は喜悅とならん。』<sup>(四)</sup>をんな産まんとする時は憂あり、その期いたるに因りてなり。子を産みてのちは苦痛をおぼえず、世に人の生れたる喜悅によりてなり。』<sup>(五)</sup>斯く汝らも今は憂あり、然れど我ふたび汝らを見ん、その時なんぢらの心喜ぶべし、その喜悅を奪ふ者なし。』<sup>(六)</sup>かの日には汝ら何事をも我に問ふまじ。誠にまことに汝らに告ぐ、汝等のすべて父に求むる物をば、我が名によりて賜ふべし。』<sup>(七)</sup>なんぢら今までは何を我が名によりて求めたることなし。求めよ、然らば受けん、而して汝らの喜悅みたさるべし。』<sup>(八)</sup>

二五 我これらの事を譬にて語りたりしが、また譬にて語らず、明白に父のことを汝らに告ぐるとき來らん。二六 その日には汝等わが名によりて求めん。我は汝らの爲に父に請ふと言はず、二七 父みづから汝らを愛し給へばなり。これ汝等われを愛し、また我の父より出で來りしことを信じたるに因る。二八 われ父より出でて世にきたれり、また世を離れて父に往くなり』<sup>(九)</sup>弟子たち言ふ『視よ、今は明白に語りて聊かも譬をいひ給はず。』<sup>(一〇)</sup>我ら今なんぢの知り給はぬ所なく、また人の汝に問ふを待ち給はぬことを知る。之によりて汝の神より出できたり給ひ

イ約一六・一六 二三・二七  
ロ約一六・五、一〇、 へ約二〇・二〇  
二八 ト(一三・八、二二) 又約一四・二〇、一六  
ハ(可九・三二) 約六・ 三、二六・一七、  
六、一 六六・七、何一三・  
二約三・三を見よ 一三、米四・九  
ホ可一六・一〇 路 撒前五・三  
チ約一六・六  
リ約一六・一六  
又約一四・二〇、一六  
ヨ約三・二九を見よ  
ワ約一五・一六  
カ約一四・一四  
ヨ約三・二九を見よ  
レ約一六・二を見よ  
ソ約一四・二〇、一六  
ラ約八・四二を見よ  
二二三  
ツ(約一六・一九、三  
ム約一三・一三、一  
六・五、一〇、一七  
六、一  
ネ約一四・二二、二三  
ウ太一三・三四を見よ  
ナ約一六・三〇(約二  
約一六・二五  
井約一六・二七

ノ太二六・三一（一）  
 三・七  
 才約一九・二七を見よ  
 ク約四・二三を見よ  
 （約一六・二二、二五）  
 ヤ約八・二九を見よ  
 マ約一四・二七を見よ  
 ケ約一五・一八―二二  
 フ太九・二を見よ  
 コ約二二・一三（羅八  
 ・三七 哥後二・一  
 四、四・七一―一、  
 六・四―一〇 黙三  
 ・二一、一二―一一）  
 エ約一・四一を見よ  
 テ（約七・三九、一三  
 ・三二）  
 ア約六・三七、三九、  
 一七・六、九、二四  
 サ約一〇・二八を見よ  
 キ約三・三五を見よ  
 ユ約五・四四 約五五  
 ・二〇  
 メ約三・一七を見よ  
 約一七・八、一八一  
 二五  
 ミ約四・三四を見よ  
 （路二・三七）  
 シ（約一三・三一）  
 工（約一・一八、五八、  
 一七・二四）  
 ヒ約一七・二を見よ  
 モ約一七・二を見よ  
 セ約一七・二六  
 ス約一七・九  
 イ約八・五一を見よ  
 ロ約六・六八を見よ  
 ハ約一五・一五、一七  
 ・二四、二六  
 ニ約八・四二を見よ  
 ホ（路二・三二） 約  
 一四・一六）  
 ヘ（路二三・三四約一  
 ・七、二〇、二二）  
 ト約一七・六  
 チ約一六・一五  
 リ撒後一・一〇  
 又約一三・一

三二 しことを信ず』三二 イエス答へ給ふ『なんぢら今、信ずるか。三三 視よ、なんぢら散されて各自おのが處にゆき、我を  
 ひとり遺すとき到らん、否すでに到れり。然れど我ひとり居るにあらず、父われと偕に在すなり。三三 此等のこと  
 を汝らに語りたるは、汝ら我に在りて平安を得んが爲なり。なんぢら世にありては患難あり、然れど雄々しかれ。  
 我すでに世に勝てり』

# 第十七章

一 イエスこれらの事を語りて、目を舉げ天を仰ぎて言ひ給ふ『父よ、時來れり、子が汝の榮光を  
 顯さんために、汝の子の榮光を顯したまへ。二 汝より賜はりし凡ての者に、永遠の生命を與へしめ  
 んとて、萬民を治むる權威を子に賜ひたればなり。三 永遠の生命は、唯一の眞の神に在す汝と汝の遣し給ひし  
 エス・キリストとを知るにあり。四 我に成さしめんとて汝の賜ひし業を成し遂げて、我は地上に汝の榮光をあら  
 はせり。五 父よ、まだ世のあらぬ前にわが汝と偕にもちたりし榮光をもて、今御前にて我に榮光あらしめ給へ。  
 六 世の中より我に賜ひし人々に我、御名をあらはせり。彼らは汝の有なるを我に賜へり、而して彼らは汝の言を  
 守りたり。七 今かれらは、凡て我に賜ひしものの汝より出づるを知る。八 我は我に賜ひし言を彼らに與へ、彼ら  
 は之を受け、わが汝より出でたるを眞に知り、なんぢの我を遣し給ひしことを信じたるなり。九 我かれらの爲に  
 願ふ、わが願ふは世のためにあらず、汝の我に賜ひたる者のためなり、彼らは即ち汝のものなり。一〇 我がものは  
 皆なんぢの有、なんぢの有は我がものなり、我かれらより榮光を受けたり。二 今より我は世に居らず、彼らは世

二五 正しき父よ、げに世は汝を知らず、然れど我は汝を知り、この者どもも汝の我を遣し給ひしことを知れ  
 二四 居るところに我と偕にをり、世の創の前より我を愛し給ひしによりて、汝の我に賜ひたる我が榮光を見んこと  
 二三 我は汝の我に賜ひし榮光を彼らに與へたり、是われらの一つなる如く、彼らも一つとならん爲なり。二三 即ち我  
 二二 我なんぢに居ることく、彼らも我らに居らん爲なり、是なんぢの我を遣し給ひしことを世の信ぜん爲なり。  
 二一 我なんぢに居ることく、彼らも我らに居らん爲なり、是なんぢの我を遣し給ひしことを世の信ぜん爲なり。  
 二〇 我なんぢに居ることく、彼らも我らに居らん爲なり、是なんぢの我を遣し給ひしことを世の信ぜん爲なり。  
 一九 また彼等のために我は己を潔めわかつ、これ眞理にて彼らも潔め別たれん爲なり。二〇 我かれらの爲の  
 一八 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 一七 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 一六 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 一五 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 一四 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 一三 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 一二 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 一一 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 一〇 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 〇九 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 〇八 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 〇七 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 〇六 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 〇五 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 〇四 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 〇三 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 〇二 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に  
 〇一 眞理にて彼らを潔め別ちたまへ、汝の御言は眞理なり。一八 汝われを世に遣し給ひし如く、我も彼らを世に

イ約一七・二三  
 (約七・三三)  
 ロ(約一七・二五)  
 ハ(約一七・六 腓三・九)  
 ニ約一七・二二、二二  
 (羅一二・五 加三・二八)  
 ト(約六・七〇 撒後二・二三)  
 チ詩四一・九  
 リ(約七・三三)  
 ヌ約一五・一一  
 ル約三・二九を見よ  
 テ約一五・一八  
 ワ約八・二三、一七・一六  
 カ太五・三七を見よ  
 ヨ約一七・一四  
 タ(約一五・三、一七・一九)  
 レ約三・一七 及び一七・三を見よ  
 ツ約二〇・二一(太一〇・五 約四・三八)  
 ヲ約一七・一一、二三  
 ヱ(約一七・八)  
 ヲ約一七・二四  
 (約一・一四)  
 ナ約一〇・三八を見よ  
 ニ約一六・二七  
 ノ約一七・二を見よ  
 オ約一二・二六を見よ  
 ク太二五・三四を見よ

(約一七・五) コ約一七・六 一三王下二三・四、二六  
 ヤ約一七・二二 エ約一五・九を見よ 六、一二 代下一五 二六  
 マ(約一七・二) 約壹 テ太二六・三〇、三六 一六、二九、二六、二二・三九  
 一・九 可一四・二六、三二 三〇・一四 耶三一 二三・一一 太二六・  
 ケ約一五・二二を見よ 路二二・三九 四〇 四七・五六 可一四 二二・三二、二七・二  
 フ約七・二九を見よ ア母後一五・二三 五 太二六・三六 可一 四三・五〇 路 約一八・一二、一八、  
 上二・三七、一五 四・三一 約一八、二二・四七、五三 二二  
 シ太二五・一を見よ 一四・四七 一八・二三、二四  
 一太二〇・二二を見よ 一・二二 徒一〇・一、一一、一二 二二・一八・七  
 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 三約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 四約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 五約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 六約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 七約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 八約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 九約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 一〇約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 一一約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 一二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 一三約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 一四約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 一五約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 一六約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 一七約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 一八約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 一九約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 二〇約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 二一約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 二二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 二三約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 二四約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 二五約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 二六約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 二七約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 二八約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 二九約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 三〇約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 三一約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 三二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 三三約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 三四約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 三五約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 三六約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 三七約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 三八約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 三九約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 四〇約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 四一約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 四二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 四三約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 四四約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 四五約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 四六約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 四七約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 四八約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 四九約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 五〇約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 五一約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 五二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 五三約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 五四約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 五五約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 五六約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 五七約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 五八約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 五九約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 六〇約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 六一約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 六二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 六三約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 六四約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 六五約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 六六約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 六七約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 六八約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 六九約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 七〇約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 七一約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 七二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 七三約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 七四約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 七五約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 七六約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 七七約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 七八約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 七九約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 八〇約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 八一約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 八二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 八三約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 八四約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 八五約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 八六約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 八七約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 八八約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 八九約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 九〇約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 九一約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 九二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 九三約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 九四約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 九五約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 九六約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 九七約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 九八約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 九九約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ  
 一〇〇約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ 二約一八・三を見よ

二六 二六 われ御名を彼らに知らしめたり、復これを知らしめん。これ我を愛し給ひたる愛の、彼らに在りて、我も彼らに居らん爲なり』

# 第一八章

一 此等のことを言ひ終へて、イエス弟子たちと偕にケデロンの小川の彼方に出でたまふ。彼處に園あり、イエス弟子等とともにども入り給ふ。ニここは弟子たちと屢々あつまり給ふ處なれば、イエスを賣るユダもこの處を知れり。三斯てユダは一組の兵隊と祭司長・パリサイ人等よりの下役どもとを受けて、炬火・燈火・武器を携へて此處にきたる。四イエス已に臨まんとする事をことごとく知り、進みいでて彼らに言ひたまふ『誰を尋ぬるか』五答ふ『ナザレのイエスを』イエス言ひたまふ『我はそれなり』イエスを賣るユダも彼らと共に立てり。六『我はそれなり』と言ひ給ひし時、かれら後退して地に倒れたり。七爰に再び『たれを尋ぬるか』と問ひ給へば『ナザレのイエスを』と言ふ。ハイエス答へ給ふ『われは夫なりと既に告げたり、我を尋ぬるならば此の人々の去るを容せ』九これ曩に『なんぢの我に賜ひし者の中より我一人をも失はず』と言ひ給ひし言の成就せん爲なり。一〇シモン・ペテロ劍をもちたるが、之を抜き大祭司の僕を擧ちて、その右の耳を斬り落す、僕の名はマルコスと云ふ。一一イエス、ペテロに言ひたまふ『劍を鞘に收めよ、父の我に賜ひたる酒杯は、われ飲まざらんや』

一二 爰にかの兵隊・千卒長・ユダヤ人の下役ども、イエスを捕へ、縛りて先づアンナスの許に曳き往く、二三



二七  
らずや』二七  
ペテロまた否いなむ折をりしもにはとりな  
鶏鳴きぬ。

受けじとて己らは官邸に入らず。二九爰にピラト彼らの前に出でゆきて言ふ『この人て對して如何なる斥公となす』

三〇  
三二  
か』  
三〇  
答へて言ふ『もし悪あくをなしたる者ものならずば汝なんぢに付わたさじ』  
三  
ピラト言ふ『なんぢら波かを引ひき取り、  
今いまが律法おきて

三三  
にしたがつ循きはひて審きはけ』ユダヤ人びといふ『我われらに人ひとを殺ころす權けん威ゐなし』三三  
これイエスおのれ己が如何いかなる死して死しぬるかを示しめして言い

ひ給ひし御言の成就せん爲なり。

三三  
三四

三三 爰(こゝ)にピラトまた官邸(くわんてい)に入り、イエスを呼び出して言ふ『なんぢはユダヤ人の王なるか』  
三四 イエス答へ給ふ

「これは汝おのれより言ふか、將わが事を人の汝に告げたるか」三  
ピラト答ふ「我はユダヤ人ならんや、女の

國人・祭司長ら汝を我に付したり、汝なにを爲ししぞ』  
イエス答へ給ふ『わが國はこの世のものならず、若し

我が國この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付さじと戦ひしならん。然れど我が國は此の世よりのもの

ならず』<sup>三七</sup>爰にピラト言ふ『されば汝は王なるか』イエス答へ給ふ『われの王たることは汝の言へるごとし。我<sup>われ</sup>

は之がために生れ、之がために世に來れり、即ち眞理につきて證せん爲なり。凡て眞理に屬する者は我が聲を

きく」<sup>三六</sup>ピラト言ふ『真理とは何ぞ』

三九  
かく言ひて再びユダヤ人の前に出でて言ふ『我この人に何の罪あるをも見ず。三九  
過越すざこしのとき我われなんぢらに

一人の囚人を赦す例あり、されば汝らユダヤ人の王をわが赦さんことを望むか』四〇。彼らまた叫びて『この人なら

ず、バラバを』と言ふ、バラバは強盜なり。

## 第一章

一 爰にピラト、イエスをとりて鞭つ。二 兵卒ども茨にて冠冕をあみ、その首にかむらせ、紫色の  
上衣をきせ、三 御許に進みて言ふ『ユダヤ人の王やすかれ』而して手掌にて打てり。四 ピラト再び

出でて人々にいふ『視よ、この人を汝らに引出す、これは何の罪あるをも我が見ぬことを汝らの知らん爲なり』

六五 爰にイエス茨の冠冕をかむり、紫色の上衣をきて出で給へば、ピラト言ふ『視よ、この人なり』六 祭司長・

下役どもイエスを見て叫びいふ『十字架につけよ、十字架につけよ』ピラト言ふ『なんぢら自らとりて十字架に

七 つけよ、我は彼に罪あるを見ず』セユダヤ人こたふ『我らに律法あり、その律法によれば死に當るべき者なり、

九八 彼はおのれを神の子となせり』ハピラトこの言をききて増々おそれ、九 再び官邸に入りてイエスに言ふ『なんぢ

一〇 は何處よりぞ』イエス答をなし給はず。一〇 ピラト言ふ『われに語らぬか、我になんぢを赦す權威あり、また十字架

二 につくる權威あるを知らぬか』二 イエス答へ給ふ『なんぢ上より賜はらずば、我に對して何の權威もなし。この

三 故に我をなんぢに付しし者の罪は更に大なり』三 斯においてピラト、イエスを赦さんことを力む。然れどユダヤ

人さけびて言ふ『なんぢ若しこの人を赦さば、カイザルの忠臣にあらず、凡そおのれを王となす者はカイザルに

三 叛くなり』三 ピラトこれらの言をききてイエスを外にひきゆき、敷石（ヘブル語にてガバタ）といふ處にて審判

四 の座につく。四 この日は過越の準備日にて、時は第六時ごろなりき。ピラト、ユダヤ人にいふ『視よ、なんぢら

五 の王なり』五 かれら叫びていふ『除け、除け、十字架につけよ』ピラト言ふ『われ汝らの王を十字架につくべけん

イ太二七・二六を見よ 五・一八 ト約一九・二 ル利二四・一六 太二六 六・六三・二七・二二、 三五一四〇、一九・ 約五・二を見よ 約ナ（太二七・四五）可

口太二七・二七・三〇 約一八・二二 六・六三・二七・二二、 三五一四〇、一九・ 約五・二を見よ 約ナ（太二七・四五）可

可一五・一六・一九 へ路二三・四を見よ 約一八・三 三四 六（徒三・一三） 一九・一七・二〇 約一五・二五）

ハ太二・二を見よ 約一八・三八、一九 約一八・三 三四 六（徒三・一三） 一九・一七・二〇 約一五・二五）

ニ太二七・二九 可一 六 又約一九・四 約一八・三三 ヨ羅一三・一 二五 約一八・三三 太二七・六二を見よ ム路二三・一八

ウ太二七・二六 可 ノ路一四・二七を見よ マ路二三・三二  
 一五・一五 路二三 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 二五 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 井一七・二四 大二七 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 三三・四四 可一 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 五・二二・三二 路 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 三三・三三・四三 ヤ(太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 コ約一九・一三を見よ サ路二二・一八  
 エ約一九・一九 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 テ(創四三・一四) 帖四 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 ユ太二七・三五 可一 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 五・二四 路二三 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 ア太二七・三五 可一 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 五・二四 路二三 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 ヌ約一九・二八、三六、 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 三七 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 ミ詩二二・一八 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 シ(太二七・三五、五六 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 可一五・四〇、四一 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 路二三・四九 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 五太二・二四六を見よ (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 ヒ路二四・一八 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 七路八・二 約二〇 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 ハ詩六九・二二 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 一、一八 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 セ約二三・二三を見よ (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 ス約二・四 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 イ約一三・一、一七 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 四 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 ロ約一九・二四 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)  
 ハ詩六九・二二 (太二七・三二) 可 (太二七・三二)

一六 や「祭司長ら答ふ『カイザルの他われらに王なし』」<sup>(一六)</sup> 爰にピラト、イエスを十字架に釘くるために彼らに付せり。  
 一七 彼ら<sup>(一七)</sup> イエスを受取りたれば、イエス已に十字架を負ひて<sup>(一七)</sup> 髑髏<sup>(一七)</sup> (ヘブル語にてゴルゴタ) といふ處に出でゆ  
 一八 き給ふ。一八 其處にて彼らイエスを十字架につく。又ほかに二人の者をともに十字架につけ、一人を右に、一人を  
 一九 左に、イエスを真中に置けり。一九 ピラト罪標を書きて十字架の上に掲ぐ『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』と記  
 二〇 したり。二〇 イエスを十字架につけし處は都に近ければ、多くのユダヤ人この標を読む、標はヘブル、ロマ、ギリ  
 二一 シヤの語にて記したり。二一 爰にユダヤ人の祭司長らピラトに言ふ『ユダヤ人の王と記さず、我はユダヤ人の王な  
 二二 りと自稱せりと記せ』<sup>(二二)</sup> ピラト答ふ『わが記したることは記したるままに』<sup>(二二)</sup>  
 二三 兵卒どもイエスを十字架につけし後、その衣をとりて四つに分け、おのおの其の一つを得たり。また下衣  
 二四 を取りしが、下衣は縫目なく、上より惣て織りたる物なれば、<sup>(二四)</sup> 兵卒ども互にいふ『これを裂くな、誰がうるか  
 二五 闇にすべし』これは聖書の成就せん爲なり。曰く『かれら互にわが衣をわけ、わが衣を闇にせり』<sup>(二五)</sup> 兵卒ども斯く  
 二六 なしたり。二五 さてイエスの十字架の傍らには、その母と母の姉妹と、クロバの妻マリヤとマグダラのマリヤと立  
 二七 てり。二六 イエスその母とその愛する弟子との近く立てるを見て、母に言ひ給ふ『をんなよ、視よ、なんちの子な  
 二八 り』<sup>(二七)</sup> また弟子に言ひたまふ『視よ、なんちの母なり』この時より、その弟子かれを己が家に接けたり。  
 二九 この後イエス萬の事の終りたるを知りて——聖書の全うせられん爲に——『われ渴く』と言ひ給ふ。二九 ここ

三〇に酸き葡萄酒の満ちたる器あり、その葡萄酒のふくみたる海綿をヒソブに著けてイエスの口に差附く。三〇イエス  
その葡萄酒をうけて後いひ給ふ「事畢りぬ」遂に首をたれて霊をわたし給ふ。

三一この日は準備日なれば、ユダヤ人、安息日に屍體を十字架のうへに留めおかじとて（殊にこの度の安息日  
は大なる日なるにより）ピラトに、彼らの脛ををりて屍體を取除かんことを請ふ。三二ここに兵卒ども來りて、イ  
エスとともに十字架に釘けられたる第一の者その他のものとの脛を折り、三三而してイエスに來りしに、はや死に給  
ふを見て、その脛ををらず。三四然るに一人の兵卒、鎗にてその脅をつきたれば、直ちに血と水と流れいづ。三五之  
を見しもの證をなす、其の證は眞なり、彼はその言ふことの眞なるを知る、これ汝等にも信ぜしめん爲なり。

三六此等のことの成りたるは「その骨くだかれず」とある聖句の成就せん爲なり。三七また他に「かれら己が刺した  
る者を見るべし」と云へる聖句あり。

三八この後、アリマタヤのヨセフとてユダヤ人を懼れ、密にイエスの弟子たりし者、イエスの屍體を引取らん  
ことをピラトに請ひたれば、ピラト許せり、乃ち往きてその屍體を引取る。三九また曾て夜、御許に來りしニコデ  
モも、沒藥・沈香の混和物を百斤ばかり携へて來る。四〇ここに彼らイエスの屍體をとり、ユダヤ人の葬りの習慣  
にしたがひて、香料とともに布にて巻けり。四一イエスの十字架につけられ給ひし處に園あり、園の中にいまだ人  
を葬りしことなき新しき墓あり。四二ユダヤ人の準備日なれば、この墓の近きままに其處にイエスを納めたり。

イ太二七・四八 可一 二約一五・二七を見よ  
五・三六 路二三・ 二約一五・二七を見よ  
三六 又出二二・四六 民九  
口約二七・四を見よ 二七 二約一五・二七を見よ  
ハ太二七・五〇 可一 二約一五・二七を見よ  
五・三七 路二三・ 二約一五・二七を見よ  
四六 約一〇・一八 ト約一九・一八  
カ三八・四二 太二七  
一七 歌四・一四  
太二・二一  
ツ約一二・二三  
ネ可一六・一を見よ  
ナ（太二六・一二） 可  
一四・八  
ラ路二四・一二 約二  
〇・五・七  
ム（約一一・四四）  
ウ路二三・五三  
非太二七・六〇  
ノ約一九・一四・三一  
オ約一九・二〇・四一  
ク一八 太二八・一  
一八 可一六・一一八  
路二四・一一〇

## 第二十章

が神、即ち汝らの神に昇る」といへ」ハ  
マダダラのマリヤ往きて弟子たちに『われは主を見たり』と告げ、また

云々の事を言ひ給ひしと告げたり。

一九 この日、即ち一週のはじめの日の夕、弟子たちユダヤ人を懼るるに因りて居るところの戸を閉ぢおきしに、イエスキタリ彼らの中に立ちて言ひたまふ『平安なんぢらに在れ』<sup>二〇</sup>斯く言ひてその手と脅とを見せたまふ、弟子たち主を見て喜べり。<sup>二一</sup>イエスまた言ひたまふ『平安なんぢらに在れ、父の我を遣し給へることく、我も亦なんぢらを遣す』<sup>二三</sup>斯く言ひて、息を吹きかけ言ひたまふ『聖靈をうけよ。<sup>二四</sup>汝ら誰の罪を赦すとも其の罪ゆるされ、誰の罪を留むるとも其の罪とどめらるべし』

二四 イエス來り給ひしとき、十二弟子の一人デドモと稱ふるトマスともに居らざりしかば、<sup>二五</sup>他の弟子これに言ふ『われら主を見たり』トマスいふ『我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脅に差入るるにあらずば信ぜじ』

二六 八日のち弟子等また家にをり、トマスも偕に居りて戸を閉ぢおきしに、イエス來り、彼らの中に立ちて言ひたまふ『平安なんぢらに在れ』<sup>二七</sup>またトマスに言ひ給ふ『なんぢの指をここに伸べて、わが手を見よ、汝の手をのべて、我が脅にさしいれよ、信ぜぬ者とならで信する者となれ』<sup>二八</sup>トマス答へて言ふ『わが主よ、わが神よ』<sup>二九</sup>イエス言ひ給ふ『なんぢ我を見しによりて信じたり、見ずして信する者は幸福なり』

三〇 この書に録さざる外の多くの徴を、イエス弟子たちの前にて行ひ給へり。<sup>三一</sup>されど此等の事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により生命を得しめんが爲なり。

イ約七・一三を見よ  
ヨ路二四・三六 約二  
二約一九・三四  
ホ約一六・二〇、二二  
リ(約七・三九 徒二・  
〇・二一、二六  
ヘ約二〇・一九を見よ  
四)  
ト約三・一七を見よ  
又太一八・一八  
ハ路二四・三九、四〇  
チ約一三・二〇(徒一  
ル約六・六七を見よ  
ヨ約二〇・二〇  
二五)  
タ約一一・一六を見よ  
タ可一六・一一を見よ  
ツ彼前一・八  
ワ約一一・一六を見よ  
レ約二〇・一九を見よ  
ネ約二一・二五  
カ約二二・一六  
約  
ソ路二四・四〇 約壹  
ナ約二・一一を見よ  
一・一  
(約二〇・  
ラ約壹五・一二  
ム太四・三を見よ  
ウ約一九・三五  
井約三・一五

ノ約二〇・一九、二六 マ約一・一六を見よ エ(路五・五) キ(路五・六、七、九) ミ約二・一八 (約六・九、一一) ロ約一・四二、二一、一七  
 オ約六・一 ケ約二・一を見よ テ路二四・一六を見よ ユ約一・三・二三を見よ (約一・三・四) モ約二・一・二五 一六・一七 ニ(路二・三・二)  
 ク約七・四、二一・一 フ約一・四五―四九 (約二・一・四) 約二・一・二〇 シ(太一・四・二九) セ約二・一・九 ハ約一・三・三七 (太  
 四(可一・六・一一) コ太四・二一可一・一 ア路二四・四一 メ母前一九・二四 賽 エ約二・一・八 ス約二〇・一九、二六 二六・三三可一四・  
 ヤ約一・一六を見よ 九路五・一〇 サ(約五・四) 二〇・二米一・八 ヒ約二・一・一〇、二三 イ約二・一・二 二九(約二・一・一六、

## 第二章

一 この後、イエス復テベリヤの海邊にて己を弟子たちに現し給ふ、その現れ給ひしこと左のごと  
 二 し。ニシモン・ペテロ、デドモと稱ふるトマス、ガリラヤのカナのナタナエル、ゼベダイの子ら及  
 三 びほかの弟子二人もともに居りしに、ニシモン・ペテロ『われ漁獵にゆく』と言へば、彼ら『われらも共に往か  
 四 ん』と言ひ、皆いでて舟に乗りしが、その夜は何をも得ざりき。四夜明の頃イエス岸に立ち給ふに、弟子たち其  
 五 のイエスなるを知らず。五イエス言ひ給ふ『子どもよ、獲物ありしか』彼ら『なし』と答ふ。六イエス言ひたまふ  
 六 『舟の右のかたに網をおろせ、然らば獲物あらん』乃ち網を下したるに、魚夥多しくして、網を曳き上ぐるこ  
 七 能はざりしかば、七イエスの愛し給ひし弟子、ペテロに言ふ『主なり』シモン・ペテロ『主なり』と聞きて、裸  
 八 なりしを上衣をまとひて海に飛びいれり。八他の弟子たちは陸を離るること遠からず、僅に五十間ばかりなりし  
 九 かば、魚の入りたる網を小舟にて曳き來り、九陸に上りて見れば、炭火ありてその上に肴あり、又パンあり。一〇  
 一〇 イエス言ひ給ふ『なんぢらの今とりたる肴を少し持ちきたれ』ニシモン・ペテロ舟に往きて網を陸に曳き上げし  
 二 に百五十三尾の大なる魚満ちたり、斯く多かりしが網は裂けざりき。二イエス言ひ給ふ『きたりて食せよ』弟子  
 三 たちその主なるを知らば『なんぢは誰ぞ』と敢て問ふ者もなし。三イエス進みてパンをとり彼らに與へ、肴をも  
 四 然なし給ふ。四イエス死人の中より甦へりてのち、弟子たちに現れ給ひし事、これにて三度なり。  
 五 斯て食したる後イエス、シモン・ペテロに言ひ給ふ『ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝りて我を愛  
 するか』ペテロいふ『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんぢ知り給ふ』イエス言ひ給ふ『わが羔羊を養へ』

- 一六 また二度いひ給ふ『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ言ふ『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんぢ知り給ふ』イエス言ひ給ふ『わが羊を牧へ』一七 三度いひ給ふ『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ三度『われを愛するか』と言ひ給ふを憂ひて言ふ『主よ、知りたまはぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんぢ識りたまふ』イエス言ひ給ふ『わが羊をやしなへ。一八 誠に誠に、なんぢに告ぐ、なんぢ若かりし時は自ら帶して欲する處を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帶せられ、汝の欲せぬ處に連れゆかれん』一九 是ペテロが如何なる死にて神の榮光を顯すかを示して言ひ給ひしなり。斯く言ひて後かれに言ひ給ふ『われに従へ』二〇 ペテロ振反りてイエスの愛したまひし弟子の從ふを見る。これは曩に夕餐のとき御胸に倚りかかりて『主よ、汝をうる者は誰か』と問ひし弟子なり。二一 ペテロこの人を見てイエスに言ふ『主よ、この人は如何に』二二 イエス言ひ給ふ『よしや我、かれが我の來るまで留るを欲すとも、汝になにの關係あらんや、汝は我に従へ』二三 爰に兄弟たちの中に、この弟子死なずと云ふ話つたはりたり。然れどイエスは死なずと言ひ給ひしにあらず『よしや我かれが我の來るまで留るを欲すとも、汝になにの關係あらんや』と言ひ給ひしなり。
- 二四 これらの事につきて證をなし、又これを録しし者は、この弟子なり、我等はその證の眞なるを知る。二五 イエスの行ひ給ひし事は、この外なほ多し、もし一つ一つ録さば、我おもふに世界もその録すところの書を載するに耐へざらん。

ヨハネ傳福音書 をはり

イ太二・六 徒二〇・二(約二一・一六)  
二八 彼前五・二 ホ約三・三を見よ  
黙七・一七 へ彼後一・一四  
ロ(約一三・三八) ト(約一二・三三、一  
ハ約一六・三〇) 八・三三)  
チ太八・二二を見よ  
約二一・二二  
リ約二一・七  
又約一三・二五  
ル約二一・二三  
テ太一六・二七、二八  
哥前四・五、一一  
二六 雅五・七 黙  
二・二五  
タ約二一・二二を見よ  
レ約一五・二七を見よ  
ソ約一・二  
カ徒一・二五を見よ  
ツ約二〇・三〇

一・五 或は「之に勝たざりき」と

譯す。

一・一八 異本「の神」なし。

一・二九 或は「負ふ」と譯す。

一・三九 今の午後四時頃ならん。

二・<sup>二九</sup> 或は「聖所」と譯す。

三・三 或は「上より」と譯す。

三・七 或は「上より」と譯す。

三・八 原語「靈」とおなじ。

三・二一 二一、或は「眞を行ふ者は

その行爲のあらはれん爲に

光に來る、神によりて行ひ

たる故なり」と譯す。

四・六 今の正午頃ならん。

四・三五 「はや」或は三六節「刈る

者」の上におく。

四・五二 今の午後一時頃ならん。

五・三 異本括弧中の句なし。

六・四〇 或は「得る事さ、終の日に

我が之を甦へらする事と是

なり」と譯す。

七・五三 異本七章五三より八章一一

までを缺く。

八・二五 或は「われ初より汝らにつ

げしに、何ぞや」と譯す。

八・三七 或は「そだたぬ」と譯す。

八・三八 或は「我、父の許にて見し

ことを語れば、汝ら父より

聞きし事を行へ」と譯す。

八・三九 異本「なせ」とあり。

八・四四 或は「虚偽者の父」と譯す。

一〇・二九 異本「わが父の我に與へ給

ひし者は、一切のものより

も大なり」とあり。

一二・二七 或は「救ひ給へさいふべき

か」と譯す。

一五・四 或は「また我を汝らに居ら

しめよ」と譯す。

一七・一五 或は「惡しき者」と譯す。

一九・一四 今の正午頃ならん。

二〇・二九 或は「信するか」と譯す。

二一・一二 或は「朝餐せよ」と譯す。

二二・<sup>一六五</sup> \*と△と原語を異にす。